
今すぐ、会いたい。

蛭 飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今すぐ、会いたい。

【Nコード】

N7592A

【作者名】

蛭 飛鳥

【あらすじ】

ちよつと内気でネガティブな主人公・ひよりの、恋愛ストーリー。

【基本1章1ページですが、文字数の関係でページがまたがっている章があります。ご注意ください】

零章・夢見がち

ちよつと背伸びをしただけで世界が見わたせた。なんてことはなかった。

小さいころ歌った『小さな世界』を思い出した。

あの歌を書いた人は嘘つきだ。現実は厳しい。世界は小さくはなかった。

だから、私がどんなに走ったって地球の裏側にはいけない。

世界は広いから、いろんな人がいて、物があるんだ。

そう、信じたい。

『世界は狭いんだ』なんて、自分を励ましたり夢をみたりしたら……なんだか現実に押し潰されそうだから。

一章：ラジオ体操

小四の夏。雨の中、私は公園のベンチに座っていた。本当はブランコで遊ぼうと思っていたのだけれど、ブランコの下には浅い水溜まりができていた。

「バカだな、おまえ。」

ブランコをぼーっと見ていた私は、その声で現実に引き戻された。振り替えると、知らない男の子だった。いや、なんとなく、見たことがあるような感じがした。

その男の子は、赤いTシャツに白い短パン。プラス、青い傘。夏とはいえ、雨の中では寒そうな格好だった。

「ラジオ体操、今日は雨で中止なんだぜ。隣の会館ではんこ押ししてもらえよ。」

「そうなの？ ならなんであなたはここにいるの？」

「なんでって、おまえみたいなのが、雨に濡れてるんじゃないかと思って。」

そういつて彼は、最高のスマイルを私にくれた。

その後、彼は私に傘を押しつけて、走り去っていった。……捨てて台詞を残して。

「明日もってこいよ！ じゃあな！」

彼は結構走るのが早かった。

……翌日、私は約束どおりラジオ体操のおともに、青い傘を手に持っていた。

公園につくと、土は昨日の雨で湿っていて、所々深めの水溜まりがあった。

公園に彼の姿は無かった。さんざん辺りを確認したけれど、結局ラジオ放送が始まって、彼はこなかった。

いよいよラジオ体操第1の最後、深呼吸をやっていると、彼がそこそと人だかりに入っていくのが見えた。

はんこをもらった後、彼の元へと走る。足に泥がはねるのがわかる。

「ずるいね。深呼吸のときにくるなんて。」

傘をわたしながらそう言うと、彼は鼻で笑った。

「小学4年生にもなって、雨の日にもラジオ体操はやるって勘違いしてるようなバカに、言われたくないね。」

「なんで私が4年生だって知ってるの?」

「おまえと同じ学年だから。」

その瞬間、『そういえばこいつを、廊下で見かけたことがあるな』と思った。

私は彼のバカにするような態度をみて、頭にきた。

「私は、ただのバカだもん。でも、そっちはわざとでしょ。皆にずるしたこと言うから!」

「えっ……いやー。わかったよ、悪かったよお。お願いだから誰にも言わないで!」

彼はさっきとは変わって、とても困った表情をした。許してあげることにした。

気付けば他に公園には誰も残っていなかった。近所の子供たちも、親子も。

「私、もう帰る。」

公園の柱時計をちらっと見てそう言った。彼も、一瞬反対方向を見たけれど、こっちに向き直った。

「名前なんて言うの?」

『管野ひより』と一言で返す。

「ひより？　なんかひよこ見たいだな！　よし、おまえ、今日からひよこな！」　勝手にひよこにさせられてちよっと嫌な気持ちになったが、私も彼にあだ名を付けてやろうと、彼の名前を聞いた。

「俺？　俺は鈴木達也。」

「じゃあ今日からたっちね。」

「たっち！？　だっせー！」

私は最初から変なあだ名を付けるのが目的だったので、大満足だった。

「じゃあね。」

午前7時30分。ようやく公園を後にした。

これが、私が彼と出会ったきっかけだった。

二章：恥ずかしがり屋

私とたっちはそれから会ったたびに挨拶をかわしたりふざけあったりしていた。家が近所だったので、学校内だけではなく公園なんかでも会った。

たっちは私を見つけると、大声で『ひよこ〜！』と叫んでいた。校内にその太い声は良く響き渡っていた。周りでは友達がクスクス笑ったりしていた。

たっちのおかげで、私のことを『ひよこ』と呼ぶのが一時期ブームになった程だ。

ところが私は、たっちのことを大声で呼べなかった。

ふざけたネーミングすぎて、本人よりも名前を呼ぶこっちが恥ずかしいし、こんな変なあだ名を考えたのが私だとわかったら、皆私のセンスを疑うだろう。

しかしついに、ばれてしまった。「ねえ、ひよりは達也のこと、なんて呼んでるの？」

廊下を友達と歩いていると、いきなりされたくない質問をされた。私は嘘をつくのがどうしても嫌で、素直に『たっち』と答えた。それも、確か恥ずかしそうに、とても小さな声で。

そんなわけで二人がなんて呼び合っているのかすぐに噂が広まり、私は恥ずかしがらずに大声で『たっち』と叫べるようになった。

「たっち！ ポケットの中！」

たっちのポケットからカードがはみ出していた。今はやりのゲームらしいけど、もちろん小学校には持ち込み禁止。

たっちは口パクで『ありがとう』と言っていた。私はたっちと出会ってから内気な性格が少しだけ外向きになった。

前の私なら、きっと考えられなかったよ。大声で叫ぶ、なんて。たっちはそんな私を見て、一体どう思っていたのだろう。

ただ、彼は、いつでも笑顔だった。

三章・思春期

私たちは学年があがり、5年生になった。同時に、クラス替えだ。私は、新しいクラスの5年3組にはいった。名前も知らない人が、結構いる。

クラスの中をざっと見渡し、窓側の棚に座っている男子を見た瞬間、少し緊張がほぐれた。 たっちだ。

「あ、ひよこ！」

たっちも私に気付いた。私は笑ってみせた。

綺麗な黒板に、席の図が白いチョークで書かれていた。私は出席番号36。周辺の人を確認してみると、斜め後ろはなんと、たっちだった。

『菅野』と『鈴木』。確かに「あいうえお順」で近い名字だ。

同じクラスで、席も近くて。なんだかますます、仲良くなれそうな気がした。

「ひよこ、これからもよろしくな。」

いつのまにか、たっちが席に就いていた。

黒の、ジャージ上下を着ている。

たっちは漫画なんかでよく見かける、『体育大好き！でも勉強は苦手です』系で、いつもジャージとか、動きやすそうな服装だった。

「うん、よろしく。」

たっちとは反対に体育が大っ嫌いな私は、いつもお洒落をしていた。いや、5年生にもなって、女子がジャージ上下を着るとなれば、運動会ぐらいなんだ。

出会ってからまだ1年なのに、なんだかすごく年をとった気がした。

もう大人への階段の1段目に、足をかけていたのかもしれない。小学5年生にもなれば、もう思春期だ。お互いに異性のことを気にしはじめるとか何とか。

それは私もたっちも同じことで、2人で話していると、まわりの目がどうしようもなく気になった。

あの女子のグループ、私たちの噂話でもしているんじゃないかな？ 『まだ男子と話したり遊んだりしてるの』なんて、軽蔑されているかもしれない。

私は気付いてた。2人がただのクラスメイトになっていたことに。でも私は傷つきもしなかった。心が縛られるような感覚が、たっちに対してなかった。

でも、その気持ちは確かに存在したのだ。たっちではない、別の人に。

四章：初恋

それは6年生に進級した直後、やっと気がついた気持ちだった。

初恋。平均的に見れば遅めな時期。

その頃は、もうたつちとは心が離れていた。今まで止まなかった噂もパタリとなくなり、私の中で『たつち』は、遠い国に住んでいる外国人のようになってしまい、存在自体記憶から消えてしまっていた。

会話だって本当にたまに、用件を伝える程度だった。

「注目！」

クラスの担任が机の上に箱をおいた。

5年生もあと1カ月で終わりという日の昼休みだった。

「これから5年生最後の席替えをします。最後の席替えは籤引きで席をきめます！」

教室のあちこちから歓喜の声があがった。今までは係ごとだったので、籤引きということは誰が隣になるのか本当にわからない。

「では右端の黒川さんから……」

順番にくじを引き、私の席は一番右側の列の前から3番目だった。移動をすると、隣の男子は学年1の秀才だった。

とはいってもまだ小学生だけ。

彼は席につこうとしている私を見上げた。そして無言で視線を前に戻す。私は今までクラスが同じだったにもかかわらず、『杉本翔』とは一言も口をきいたことがなく、目が合っても2人とも無言だった。

（ああ、なんで最後の席替えが杉本翔の隣の席なんだろう。）

まあいい、このメンバーはどうせ6年生になってもかわらないんだ、なんて思っていた。私の小学校は、2年に1度クラス替えだか

らだ。

そんなふうに分で自分を慰めながらも、私はたつちを見ていた。私が一番右側の列に座っているのにたいして、たつちは一番左側、言い換えれば窓側だった。

なぜだかわからないけど、ため息をつく。たつちを見た瞬間、もう彼は隣の女子と会話していたからかもしれない。

また席が近くなれば、昔のように。

きつと杉本翔も、今頃は憂鬱だろう。私と隣になってしまった。

……いや、そうでもないらしい。目の前の席に、体格のいい河原がいる。杉本翔は河原と仲がよく、私を置いてきぼりにして、喋っている。

2回目のため息をつく。きつと隣の杉本翔には、失礼な話だろう。

「ため息ばかりだな！ ひよこ。」

ひよこ。その響きが、懐かしかった。「冗談まじりに、少なくとも杉本翔よりは私と仲がいい河原が言った。

「そんなに翔の隣が、嫌かよー。それとも、愛情の裏返し？ ヒューヒュー！」

「バカ、河原。」

こんなとき焦っていて、顔を赤らめていれば……もしかして私に気があったかもしれないけど、杉本翔の声は冷静で、ただただ河原の冗談に笑っていただけだった。

「ごめんな、ひよこ。」

杉本翔が、こっちを向いた。黒髪に銀の眼鏡をしている。いや、それ依然に。私を名前で呼んだ。

「うっん、別に。」

私は杉本翔のことを、『翔』と呼ぶことに決めた。

私はいそいでうつむいて、自分の世界にはいった。だって、ものすごくドキドキしていたから。多分、顔が赤くなっていた。

男子に話し掛けられた。たつちと、河原以外の男子に。

私の世界には、今まで仲良しの女子と、たつちと、河原しかいなかったのに。突然、翔がはいってきた。

ただ一言、ごめんって言われただけなのに。こんなに胸が熱くなる自分が嫌だった。

「どうした？」

再びはいつてくる、変声期前の、翔の高い声。

「大丈夫。」

とっさに強がって見せると、翔は笑った。

たつちと翔が、重なって見えた。

ずっと浮かればなしだった。終業式までのわずかな時間、授業中なんかは、私と河原と翔だけの、空間に思えた程だった。

翔のおかげでバカな河原と私は算数の問題もスラスラだった。

「小学校から苦労しているようじゃ、中学は大変だぞ。」

「翔は字、汚いじゃん。」

そんなふうになると、また翔は笑った。

「じゃあどっちもだめな河原はどうなんだよ。」

河原も笑った。でも河原の笑い声はデカすぎて、先生に叱られてたっけ。

あの時は気付かなかっただ。でも、離れてから気付いたの。：

：私いつも、気付くの遅いから。

6年生に進級した4月、教室で自分が、2つ前の席に座っている翔を何気なく見つめていたことに、気付いた。

五章：焦り

席が離れれば、もう翔とは話すことはなくなった。もともと翔はあまり女子に話し掛けたりしないし、私も男子に話し掛けないから、たっちと私のように、ただのクラスメイトになっていった。

きつと翔の中でも、私との記憶が薄れつつあるのだろう。

しかし私は違う。翔への一方的な気持ち、燃え上がっていた。ぼおっとしていると、翔を目で追い掛ける毎日。話し掛けたくても、話し掛けられない。……もどかしくて、胸が張り裂けそうだった。

内気な私は、親友にも悩みを相談することなんてなくて、いつも笑顔をふるまっていた。でも、内心は違う。

（たっちと私みたいになりたくない。）
たっちとは自然に関係が消えた。でも、翔との関係は消えたくないと思っている。

いつもは狭く感じるこの教室も、その時は広く感じた。もっと翔との距離が縮まればいいのに、と机を少しだけ前に出したりもした。無駄な足掻きだとわかっていても。

『このまま、終わりにしたくない』

そんな想いが、私を後押ししようとする。しかし、私は力強く踏み止まり、翔との距離を広める。

こんな、勇気をあと少しだけだせば……という毎日が拷問のように続き、いつしかそれは、『見ていただけで十分』と満足感のレベルを下げていた。

「部屋の中、整理しておきなさいよ。」

家の玄関を開けた瞬間、お母さんの言葉を思い出し、一見片付いているように見える小さな私の部屋に、カバンをおいた。

ベッドに体を勢い良く滑りこませ、一気に睡魔に襲われるも、私は必死に起き上がる。

「まずは机の中でもやるかぁー。」
両親ともに仕事で、誰もいない家に、自分の独り言が不気味に響く。

次に1番下の、1番大きな引き出しを開け、適当にあさる。

信じられない点数のテストや膨大な枚数のプリントは、即処分決定。ごみ箱に押し込んだ。

次に出てきたのは

「あつ」

思わず声をあげる。こんな古いモノ……どうしてとってあるんだろっ？

1日も休むことなく、ラジオ体操に通っていたようで、ずらりとスタンプが並んでいる。28日の紫の熊さんがにじんでいる。4年生の夏休みの、ラジオ体操のカードだった。

8月5日、『雨』というスタンプが押されていた。見た瞬間、ふいに甦る、あの人の笑顔。彼と出会った日だった。

鈴木達也　もう記憶の中でしか、笑ってくれない人。

今度はたつちが、翔とダブった。

翔も、記憶の中でしか笑ってくれない　。

窓の外に、空のグラデーションが映っていた。

私自身が、部屋に暗い影を落とす。

1度過去を探り始めると、とまらなくなった。過去にとらわれすぎて、私だけ置いていかれているような気がした。

人の笑顔を見ると、嫉妬するようになっていた　。

第六章・勇気の押しつけ

私って、どうしようもない人間だなあ。

こうして過去を振り替えてみると、つくづく思う。

決して今に始まったことじゃない。小学生のときからずっと。なんで、翔に話し掛ける勇気もなかったんだろう？

あるとき話し掛けていれば、あと5分遅く教室をであれば、肩に付いている糸をとってあげれば。

行動した後の後悔より、行動しなかったときの後悔のほうが、恐ろしい。

「あと3日かー。」

「うん。」

河原とは、普通に会話できるのに。

実は、河原と会話するたびに、翔が話に入ってくるのではないかと、期待している。でも、いつも期待外れだった。

とうとう、卒業式まであと3日とまで迫ってきてしまった。

「小学生のうちに、いろいろやっとなきゃな！」

「あと3日なのに……何言ってるの？」

河原は照れ笑いをした。でも実際、私は自分の台詞を自分に言いたいくらいだった。

あと3日なのに。何も出来ていない、私。翔に何か 言わなきゃ。

そう思うだけで、何もしないことは、わかっている。私は『待つ』
専門。

勇気を分けてほしいと思うぐらい、勇気がない12歳。

「でも、ひよりは何かないの？ やり残したこと。皆きつと、何か

ひとつはあるぜ。俺にもある。あと3日あるんだし、やらなきゃ。

……でしょ？」

照れ笑いをやめて、真剣にそう言う河原。考え方を変えたのかな。

「河原はやり残したこと、やるの？」

「もちろん。」

「偉いね。」

素直にそう言った私に、河原は何か、引っ掛かったらしい。

「別に偉くないよ。でもやんない奴は、変われないよ。努力したり、勇気を出したりしなきゃ」

河原は顔をしかめた。私の顔が変だったのか。

耳を塞ぎたかった。綺麗事なんか聞きたくない。河原、言っとおりすぎて嫌だよ。

やり残したことを、やり通すために。簡単に勇気が出せるのなら、苦労しない。それが出来ないから、私は困ってるの。私は河原じゃない。勇気なんか簡単に出不せない。

「私が内気っていう事、知ってる癖に。」

私は冷たく言い放つと、カバンを持って教室を出た。

河原、ありがとう。河原だけだよ、貴方は特別。素直に何でも、自由に私の考えを言うことができた。

めっちゃくちゃな放課後。早く家に帰って、布団にくるまって

明日になったら、何もなかったように河原に話し掛けて。

「待てよひより！」

考え事をしながら靴を靴箱から取り出していた最中だった。河原……。

「卑怯だぞ！」

「何が？」

「……好き、なのに。」

手から外靴が滑り落ちた。2つの靴はそれぞれ床に落ち、跳ね返り、静かに転がった。

本当は何か言いたかった。せめて『河原』と名前ぐらい口に出せないか、と思った。

でも結局は何も言えなかった。何を言っているのかわからない。目の前にいる河原は幻覚なのではないだろうか？　なんて思った。そう欲しかった。

河原。友達でしょ？　皆『異性』ということに気がするけど。『異性』を恋愛対象にしか見てないけど。そんなことを気にとめない、友達、でしょ？

友達だよ。友達以上、友達未満。友達なんだよ！

心の中にはそれしかない。『友達』と素直に言えば、それはイコール、河原をふる。

しかし、私が言葉を口から出す前に。沈黙に耐えかねた河原の声、玄関にこだました。

「ひより。内気とか関係ねえよ。俺は勇気だしたぞ！　俺は勇気だしたのに……ひよりは勇気ださないなんて、卑怯だから！」

「……バーカ。」

何で『好き』だなんていうの。河原が勇気だしたから私も、なんて無理矢理だよ。

無理、なの。勇気なんて、どんなに絞っても出てこない。

「諦めるなよ。」

そんな……無理って思った直後に言うなんて。

「俺みたいに、諦めるな。」

泣いてる……河原が。

「私のこと、諦めたの？」

「ああ。ダメなんだろ？」

「う……ん。」

断るのが何故だか、嫌だった。でも、翔が好きだった。

ごめんね。

その日1日、卒業の騒ぎどころではなかった。ずっとずっと謝り続けていた。……心の中で。

謝ってもつぐないきれない。河原を裏切った。踏み躪った。

朝も昼も帰りも。翔に結局、何も言えなかった。

……ごめんね。

河原の視線が突き刺さる。

卒業式の夜。家中、独りで泣いた。

……無力な自分に。

七章：慣れない制服

春。中学生になったと同時に、桜が咲かないかなあなんて、窓の外を見つめていた。

春は始まりの季節のはずなのに、なんだかいつもぼんやりして終わっていく。

制服を買ったときにも、中学生になるという実感がわかなかったぐらいだ。

実際、中学校は小学校の右隣に建っていて、小学生のときのメンバーが、そのまま中学生に進学するだけの話だとも思っていた。

私は入学式当日、長い靴下を履くのに時間が掛かり、お母さんを苛立たせた。

履き慣れないスカート。異常にスースーする。堅苦しいブレザー。首元についたりボン。

全てが初めてで、新鮮だった。興奮して、でも不安で。こんな感情、もう今ではなかなか抱くことができない。

車のクラクションが聞こえた。2階の自分の部屋の窓から覗いてみる。

お父さんが、早く車に乗れと促していた。

車に乗り、1、2分で中学校の前についた。隣には、つい最近まで通っていた小学校がある。小学校と中学校の境目にある道路が、2つの空間を区切っていた。

「じゃあな、頑張つてこいよ。」

お父さんだけ車に残り、小さく手を振る。お父さんはこれから仕事だ。

「うん、ありがと。」

車を見送ると、お母さんと共に学校にはいる。玄関で指定の上靴を取出し、履く。踵の部分がまだ堅く、うまく足がはまらない。

「早くしなさい。」

とろい私に、またお母さんがイライラしている。

私は入学早々、嫌な気持ちで、1学年の教室がある3階へのぼった。

小学校より、中学校の方が多少広い空間のようで、教室の前には無駄なスペースがあった。

そこは『ホール』と呼ばれていて、ホールには掲示板がズラリと並んでいた。1組から5組まで順に生徒の名前が書いてある。

私は4組らしい。

クラスがわかった所で、生徒と保護者は別れる。お母さんは、入学式が始まるまで、多目的室で待機らしい。

私はお母さんと別れると、新しいクラスの4組にはいった。

もうあまり覚えていないけれど、5年生のときも、同じような新鮮な感覚があっただろう。

黒板に書いてある席にっこうとすると、仲良しの恵メグミの声がする。

「ひよりのい！ よかったあ。仲良しの人、誰もいないかと思ってた。」

「恵！ 今年もクラス一緒かあ。よろしくね。」

簡単な挨拶をかわし、それぞれ席につく。

恵の名前は『中野』のため、席が少し離れていた。

黒板の右上から、ひとりずつ名前を確認する。

(いない……。)

河原がいない。よかったとも、言えるかもしれない。あいつとクラスが一緒なのは、私だけではなく河原も気まずいだろう。

たっちもない。そんなに気にしていたわけではないけれど、や

はりたつちの笑顔が今でも思い出せるのは、多少たつちの存在が心に根付いているからだろう。

そして、翔は　　いない！　杉本翔の名前が、1年4組にはなかった。3回確認しても無いということは、やはり翔とは、同じクラスにはなれなかつたんだ。

がつくりと肩を落とし、運命を恨む。

確か中学では、2年に進級するときだけクラス替えをする。3年に進級するときは、受験の関係もあつてクラス替えはしない。

つまり、今のクラスは1年間で終わる。来年、翔と同じクラスになれば、2年間は　　でも、今年、好きな人が変わるかも……。何が何だかよくわからなかつた。結局、しょうがないんだ。どんなに運命を恨んでも、クラスは変わらない。

入学式、適当に背の順をつくつた。私は前から3番目で、去年と同じ様に、背が低いことを実感するはめになった。

体育館にはいると、吹奏楽部の演奏が聞こえる。

小学校では何でもテープだったから、たのもしい。

入学式の中身なんて、たいした物じゃなかつた。校長先生の話しか印象に残っていない。威厳のある先輩たちが、真後ろに座っていて、緊張もしていた。

入学式も無事終わり、教室で担任となつた橋本先生の話聞いて、生徒たちは解散した。

お母さんと一緒に帰ろうと、正面玄関から外に出ると、見知らぬ誰かの母親と喋っているのを見つけた。

何だかその人に見覚えがあるような気がして、頭をひねる。

(あつ……！)

わかつた！　たつちのお母さんだ。

まあ、たっちがうんざりしたように、その人の近くにいたからだけ。

私の心はたっちから離れていった。だけど、知らないうちに、親のほうは仲良くなったらしい。

私は、たっちの家に直接遊びに行ったことが無いので、たっちのお母さんの顔を、あまりよく覚えていなかった。

「こんにちは。」

たっちのお母さんに、一言挨拶をする。

「あら、ひよりちゃん？」

私が入ってきたことにより、今度はお互いの子供の話が始まる。

私はお母さんから少し離れて、話が終わるのを待つ。

「ひよこ、何組？」

ふいに、たっちに話し掛けられた。こうやって何気ない話しをするのも、かなり久しぶりだ。それなのに、普通に話し掛けちゃって「4組。」

そうやって普通に返事をしながら、たっちを観察してみる。

初めて会ったときは、確か同じくらいの背だったはずなのに。少し、抜かされていた。

「俺は、去年と同じ、3組。」

そう言っているたっちの表情は、暗かった。それにしても、たっちは何を着ても似合う。

「あんまりよくないクラスなの？」

「いや……仲いい奴と、クラス離れちゃったから。」

たっちは、無理矢理笑顔を造ってみせた。

「しょうがないよ、もうクラスは変わんないし。仲良しの人ぐらい、たっちならすぐ出来るって！」

そう言って明るく励ましてあげると、たっちは複雑な表情をしてみせた。厳しい表情なのか、悲しい表情なのか。読み取ることは不可能だった。

「そういう意味じゃない。」

じゃあ、どついう意味なの？

八章：不思議な二人

麦藁帽子が飛んできた。

今日は中学校生活が始まって初の、土曜日。
夕方頃、近所を散歩していると、麦藁帽子が、私の足元にふわりと落ちた。

「すみま、せえん。」

音楽で言えば、この声はソプラノに分類されるだろう。
振り替えると、私より背が低い女の子がいた。

「あの、それ、私のです。」

女の子が帽子を指差すので、拾って手渡した。

「ありがとうございます。」

女の子は、帽子を受け取ると、すぐにかぶってみせた。とても似合っている。

「何、してるんですか。」

目の前の子とは対照的な女の子が、子走りでやってくる。

背は、コンプレックスになるほど、高くも低くもなく。髪は栗色で、やせ形。麦藁帽子の女の子の『幼い可愛さ』とは違う、『大人っぽい可愛さ』。

でも、麦藁帽子の子に敬語。……大和撫子？

「早くしないと、遅れちゃいます。」

「ごめん、ごめん……あ、本当に、ありがとうございます！」

そういつて小さな女の子は、栗色の髪の女の子とともに、去っていった。

なんだったんだらう、あの不思議なコンビ。

《放課後部活動体験》

3階に青色のポスターが、いたるところにはり付けられていた。今週は、放課後、興味がある部活動を体験したり、見学できるらしい。

「ひよりは、部活はいる？」

青いポスターを念入りに見つめながら、恵が言う。

「はいんないと思う……どの部活も、興味無いし。恵は？」

「吹奏楽部が、いいかなあ、なんて。」

そう言う恵に付き添って、放課後、吹奏楽部を見学することにした。

吹奏楽部の活動場所は、もちろん音楽室。

緊張した面持ちで、恵と音楽室の重い扉を開ける。

音楽室には初めてはいったわけじゃないけれど、未知の世界だった。

椅子が40個弱並べられていて、楽器をもった先輩たちが、こちらをむいて座っていた。

1年生は、もう何人かいて、なんと楽器を吹いていた。

(み、見るだけじゃないのー!?)

てつきり、先輩たちが吹いているところを、見ているだけかと思っていたのに。

「こんにちはっ。今日は見学に来てくれてありがとうー！何か吹い

てみたい楽器、ある？」

「いや、あのお、特に……。」

「それじゃあ、フルートね！」

私はただ、恵の付き添いで来ただけなのに。

恵より先に、先輩たちの手によって、体験することになってしまった。

しかも、なぜかフルート。

「……うああ！ 帽子ひろってくれた子じゃない！ 1年生だったんだあ。……てつきり年上かと……」

そう、なんとフルート担当の先輩は、麦藁帽子をかぶっていた女の子だったのだ！

制服を来ているおかげで、多少中学生という雰囲気が出ているものの、私から見た彼女の第1印象は、小学4年生だった。

まさか、先輩だったなんて……。

「えーつと、フルート担当、2年生の慶子ですつ。皆からはケイツと呼ばれてるよ！」

「あ、私は、管野ひよりと言います！」

私が固まっているのを見て、ケイ先輩は笑った。
本当に先輩なのかと、疑いたい幼さだ。

「奈央ちゃん!？」

いきなり、ケイ先輩が目を丸くした。視線の先を確かめようと、振り向くと 大和撫子がいた。

「ケイ先輩。」

どうやらあの子も、1年生らしい。これで、あの子が、なぜ敬語を使っていたのかがわかった。

顔に見覚えが無いということは、私とは別の小学校から来たのだらう。

「吹奏楽、はいるの？」

「実は、入る気はないんですけど……楽器が吹けるのは、今しかないと思つて。」

「そうなんだ、残念。楽しんでつてね！」

『奈央ちゃん』と呼ばれたその子は、やっぱり大人っぽくて、特に背が小さい私みたいいな人から見ると、羨ましい。

奈央ちゃんは、軽くケイ先輩に挨拶をすると、カタツムリみたい

な楽器……ホルンだっけな……の元へと行った。

「奈央ちゃんと私、近所に住んでるの。小学校も同じでね、つい最近までは、タメ口だったぐらいなんだけど……あ、ごめんごめん。」

「い、いえ……」

そんなに、奈央ちゃんを慕っているのかな？

私はその後、フルートを吹かせてもらった。もっとも、吹いたとはいえなくて、空気の虚しい音がするだけだった。

先輩に迷惑をかけてはいけないと、焦れば焦るほど、吹けない。

「もっと肩の力を、抜いて。姿勢はね……」

対して先輩は、落ち着いていて、吹けるようになるまでレッスンを続ける。

こうして私も、なんとか音を出すことができた。

「さあて、次はどの楽器を吹こうか？」

「ええつとお……」

「ケイ先輩。」

その時、また奈央ちゃんの声が出た。さすがに、後ろからの不意打ちには、びつくりする。

「フルート吹いてみたいんですけど、いいですか？」

私のはつきりしない態度とは違い、淡々と話す。

「実を言うと、まだケイ先輩がフルートを吹いているところ、はっきりと見ていなくて。」

そう言ってほんのり笑ってケイ先輩をしばらく見つめると、隣の私をちらっと見て、すぐにそらした。

「……ああ、ちょっとまってね。今、この子の楽器選びをしているところだから。奈央ちゃんは、その椅子に座ってて。」

奈央ちゃんの考えを悟ったように、急いで話すケイ先輩。

私はその台詞に、遣り切れない思いを感じた。ケイ先輩は、皆に對して暖かく振る舞っているように見えるけど、奈央ちゃんに對し

てだけ、少し態度が違う。

奈央ちゃんのことには『奈央ちゃん』と言い、私のことは『この子』と言う。

まるでケイ先輩が、過保護な母親のよう。

奈央ちゃんはケイ先輩に言われた通り席につき、密かに微笑む。

何？

もしかして、奈央ちゃんは、嫉妬でもしていたのだろうか？ 私

がケイ先輩と一緒にいたから。

そういえば、麦藁帽子をひろったときも、奈央ちゃんはケイ先輩に向かつて、早く自分のところに来るように促していた気がする。

だとしたら、すごい独占欲！

「ひより！」

音楽室の出入口の扉の前で、恵が私を呼んでいる。どうやらもう、帰るらしい。

「私、もう帰ります！」

ケイ先輩を冷たくつきはなした。どうせ、早く奈央ちゃんとお喋りしたいだなんて、思っていただろうから。

私なんて、所詮邪魔者。

奈央ちゃんの不気味な微笑みが、頭から焼き付いて離れなかった。

九章：部活

部活動見学の翌日のことだった。その日は1時間目から、私の嫌いな数学で、気分がもやもやしていた。

しかも数学の先生は、いつも授業終了のチャイムが鳴っても、最低2分は号令をかけないので、クラスメイトは皆してイライラしていた。

先生が教室から立ち去った後、机の上の教科書やら参考書やらを鞆にしまっていたときだった。

ちょうど恵が次の授業の支度をすませ、私も席から立ち上がろうとすると

「菅野さん。」

私のことを、誰かが呼んだ。多分、教室外だろう。声の主を確認しようと、振り向き、はっとした。

「奈央ちゃん？」

恵と一緒に、教室を出た。奈央ちゃんは自分から、こちらに近づいてくる。

「私の名前、知ってたのね。……あ、どうも。吉原奈央です。」
奈央ちゃんが、恵の方を見て、言う。

なんでこの子が、私を呼んだのか、わからなかった。友達でもないし……いや、知り合いとも呼べるレベルじゃない。私は奈央ちゃんに名前を教えてないし、私たちの関係は、ざっと顔見知り程度だろう。

「あの子、菅野さん……面倒だから、ひよりちゃんでもいいかな？
ひよりちゃんは、吹奏楽部はいるの？」

勝手に同意も求められず、私は『ひよりちゃん』になり、しかも唐突に部活の話題を持ち込んできて、少し気分が悪かった。

「わ、私はいんないけど。恵ははいるよ？」
すると、奈央ちゃんは恵には興味なさそうに、『ふうん』とかえ
す。

「じゃあ、バドは？」

「バド？ バドミントン？ は、はいるわけないよ！」

基本的に運動が苦手な私は、奈央ちゃんの質問を、すぐさま否定
した。

「そっか。じゃあね。」

奈央ちゃんは4組の時計を確認すると、急いで隣の3組にはいっ
ていった。

「何、あの子。」

恵が不思議そうに言う。

教室にはいつてからも、恵は奈央ちゃんのことを話していた。自
己中だとか、可愛いとか、モテそうだとか。

私は、恵が言ったことが、大体当てはまっていると思った。

しかし、私は、奈央ちゃんの話題のほかに、部活の話に関わる、
『あること』を考えていた。

……翔のこと。

翔は、部活にはいるのかな？ だとしたら、何部だろう。同じ部
活にはいれば、たとえ違うクラスでも、会話くらいはできるんじゃない
かな。

でも、吹奏楽部と美術部以外は、すべて体育会系だから、部活に
はいるとしたら、体育会系だろうなあ。

文化系ならまだしも、体育会系になんて、はいれないよ……。
……思い切って、誰かに相談しちゃうのかな。

授業中、私の心の中で、2人、候補が決まった。

恵と、たっち。

恵は、親友だし、自然に候補にはいった。

たっちは……男子としての立場から、アドバイスしてくれそうだし、私が相談を持ちかけても、それを人には絶対に言わないという『信頼』があるから。でも、やっぱり、抵抗があるけど。

どちらにしろ、私が翔に片想いしていることは知らない。

私は散々悩んだ末、相談相手を決定した。

十章：河原

放課後。教室の中には、まだ数名の生徒が残っていた。

しかし小学校のときのように、いつまでもダラダラたまっていることはできない。下校時間というものがあり、それをすぎても校内にいれば、先生に指導をうける。

教室の中からひとり、またひとりと姿が消え、残るは恵と私だけ。

「ねえ、早く帰るお。下校時間過ぎちゃうよ?」

恵が言ったとおり、あと10分でタイムリミットだった。

「先に帰って。寄る所があるから……ごめんね。」

「んもう。早く言ってよ!」

いつも優しく明るい恵も、さすがに頭にきたみたいだった。

私は恵にもう一度謝ると、教室から出ていく恵を見送った。

私が学校に止まっているのには訳があつて、帰宅していく生徒たちに、私がある場所へむかうのを見られなくなかったからだ。

私が自分の席に座って、ぼおつと3階の窓から、空を眺めていると、コツコツと足音が

「もうすぐ下校時間を過ぎるぞ。早く学校から出なさい。」

違う学年を受け持つ、近藤先生だった。

タイムリミットまであと5分、そろそろ学校を出てもいいだろうと思つた私は、何の抵抗もなく、

「はい」

と返事をした。

玄関を出て、私は家とは反対方向に歩き始めた。

うつむいて、灰色のコンクリートを見つめながら、何と喋って話を切り出そうか、考える。

ちやうど小学校の前に差し掛かり、一瞬、懐かしい校舎を見上げる。

「河原!？」

最近は疎遠になってしまった河原が、小学校の玄関に座っていた。私がびっくりして大声を出したおかげで、河原はこっちに気付いた。

手をあげて、挨拶をした。私も軽く手をあげて見せる。

そしてその場を、足早に去った。昔……といってもまだ1年もたっていないけど……河原に告白されてから、何となく河原とは、かわりたくなくなってしまったからだ。

早歩きのまま、私は目的地へと急いだ。

……河原のことを考えながら。

私は、河原とはもうかわらないようにしようと思っていたのに……。河原を見れば、とたんに名前を叫んでしまうし。翔に対しては、とてもできない。

河原はそんな私を見て、反応するし。私もちゃんと挨拶かえすし……。

私は河原こと、どういふふうに思ってる？

友達未満か以上か。

河原が私のこと、まだ引きずっていたら？ もしかして、振られても諦め切れずに、私のことが、まだ好きかも。

ちょっと考えただけで、いろいろ考えてしまう特徴は、私のプラスでもマイナスでもあった。

十一章：相談

目的地は、あるコンビニの前だった。

いろいろと考えをめぐらせていて、頭が一杯だったのに、コンビニの看板が見えてくると、思考が爆発しそうになった。

コンビニの裏側からそろそろと近付き、一度立ち止まって、呼吸を整える。

そおつと駐車場を見て見ると、もう相談相手が、端のほうで座り込んでいた。

（大丈夫、あの人は何も、知らないんだから。）
勇気を出して、相手に近づいた。

恵と同じく黒髪。しかしショートではなくロングで、背も恵よりずっと高い。

「こんにちは。菜々美先輩。」

「あ、ひよちゃん。」

そう、私は、相談相手候補にはいなかった、恵のお姉さん・菜々美先輩を選んだ。

恵とよく似ていて、恵からすっかり子供っぽさを抜いた感じだった。

菜々美先輩なら、私のまわりの状況や人物を知らないから、気軽に相談できる。ちなみに、今、高校2年生。

「あー、つい最近まで、『菜々美ちゃん』なんて呼ばれてたから、急に敬語とか、びっくりだよ？」

「や、やっぱりもう、中学生なので。」

ケイ先輩と一緒にいるより、何倍も緊張した。かすかに手が震えている。

コンビニの中の白い電灯が、暗くなりはじめたあたりを照らして

いた。

私たちはそんなコンビに背を向いて座ると、しばらく黙っていた。

「あのさあ、何なのかな……相談って。」

菜々美先輩がゆっくりといった。私はとぎれとぎれに、事情を説明した。

そして最後に、無理をして、好きな人と同じ部活にはいったほうがいいかどうか聞いた。

菜々美先輩は声もなく笑うと、すつと顔をあげて、空を見ていた。しばらく私も菜々美先輩の真似をして、空を見上げた。

「別に、相手に合わせなくても、いいんじゃないかなあ。」

恵と似て、少しおっとりとしたしゃべり方で、菜々美先輩は結論を言った。

「だって、部活動は中学校生活の3年間のあいだ、ずっと継続されるものなんだよ？ 同じ部活に好きな人がいても、話せるかわからないし、好きな人がかわるかもしれないし、なによりひよちゃんは、運動が苦手なんでしょ？ 部活はいつても、きつと後悔すると思うんだ。」

私は

「はい」

と一言返事をした。菜々美先輩は優しく笑って答えてくれて、すごくほっとした。

でも 本当にこれでいいのかな？ と思ってしまう。

計算問題のように、答えなんてないし。相談している立場なのに、すごく失礼だけど……。

けど、菜々美先輩が一生懸命考えて出した、答えだもんね。

「ひよちゃん！　アイスおごったげる！」
「いいんですか!？」

悩み事なんて、人間なんだから、ひとつはある。

でも、私は、幸せだった。

コンビニで買ってもらった、ソーダ味のアイスに、思いっきりかぶりついた。

十二章：接点

あの相談のことは、誰にも言わないと、菜々美先輩にその後、言われた。

菜々美先輩の妹であり、私の親友である、恵にも。

恵といえば、もう吹奏楽部の、入部手続きをすませたらしい。来週、活動開始、だとか。

私は菜々美先輩に言われたとおり、どこの部活にもはいらなかった。

「ねえ恵、なんで吹奏楽部はいつたの？」

今まで一度も聞いたことがなかった、恵が吹奏楽にはいる理由を、昼休み、廊下をぐるぐる歩きまわりながら聞いた。

「お姉ちゃんが吹奏楽部だったから、その影響。」

「え、菜々美先輩、吹奏楽部だったんだ……。」

恵は

「うん」

と一言、返事を返すと、楽器について熱く語りはじめる……。

正直、サクソとかトロンボーンとか、ごちゃごちゃ楽器の名前を言われても、実物を見なければ、よくわからない。

私は適当に相づちを打ち、話が一段落したところで、話し掛ける。

「菜々美先輩、なんの楽器担当してたの？」

「お願いですから、私ができる楽器ですよ！」

「フルート。」

私は頭の中で、苦手な計算をする。

ケイ先輩は中2、菜々美先輩は高2。

ということは、ケイ先輩が中1のときに、菜々美先輩は高1……

直接、ではないにしろ、菜々美先輩はケイ先輩の先輩なんだ。

「ケイ先輩、って言う人にあつた？」

「あ、うん。3年生の先輩から、私のお姉ちゃんの話は、少し聞いてみたいで。今年、菜々美先輩の妹がくる、みたいな話が、吹奏楽部内であつたんだって。」

「ふうん。」

「中野って名字を見て、びっくりしてたよ。」

そういつて、胸の名札をちらつかせた。

「ほら、私とひよりが一緒に見学に言ったとき、すぐ帰ったじゃない？ 私、1日だけじゃ満足できなくて、何度も吹奏楽部に見学にいったの。ひよりには迷惑になるから、誘わなかったけど。」

そういえばあの日、私はフルートしか吹けなかったんだっけ……
だったら恵もきつとたいして吹いてない。

それにしても、ケイ先輩と菜々美先輩に、意外な接点があつたなんて……。

「そうだ！ お姉ちゃんの恋バナ、話してあげようかあ？ 参考程度に。」

一瞬、どきつとした。……『参考』なんて、まるで私が今、恋してるみたいに言ったから。

「う……ん。聞かせて。」

私は戸惑いぎみに返事をした。

「お姉ちゃんが吹奏楽部にいた時代、3年間とも、部員で男子は1人しかいなかったんだって。」

私は、30人くらいの女子に囲まれている男子を、思い浮べた。

「でね、その男子には、片想いの人がいて……。」

恵はだんだん声の音量を上げ、最後には囁くようにこういった。

「それが、お姉ちゃんだったの。」

予想内の展開だけど、まるでホラー物を話しているような話し方なので、ぞくつときた。

「それでね、なんとその男子は……」

何かどんでん返しがあるのかな、と期待する。

「2組の杉本翔のお兄ちゃんなの。」

「翔の!？」

予想を大きく上回る返答に、胸が踊った。何気ない話でも、少しでも翔の名前が出てくると、嬉しくなる。

「それで? 今は!？」

「今、お姉ちゃんが付き合ってる彼氏が、杉本翔のお兄ちゃんなんだって。だから、この話を、お姉ちゃんから聞かされたの。」

すっかり興奮状態の私は、翔のお兄さんの顔を、思い浮べていた。

それにしても、ああ……世界はこんなに狭いんだ。私のまわりの人たちが、糸のように繋がる、なんて。

「それでさあ……翔のことをよろしく、なんて、杉本翔のお兄ちゃんに、言われちゃった……。」

顔を赤らめて話す、恵。視線は床下へと注がれていた。

とたんに私は、冷静になる。

「……好きなの?」

小さな声で、聞いた。こんなことを堂々と聞くなんて、よっぽど気が動転していたんだ……。

「あ、ごめん、もう1回。」

私の小さな声は、大きなチャイムの音で、かき消されてしまっていた。

「な、なんでもない!」

私の顔も、赤かったと思う。

十三章：似たもの同士

教室に入り、席につくと、真っ白だった頭が、少しずつドス黒い色に染まっていた。

きっとあの恵の態度……絶対、翔のことが好きだ！

でも、別にいいじゃん。翔は誰のものでもないんだし。先に奪っちゃえばいいんだ！……なんていう考え方は、できなかった。少しネガティブな私は、大したことのない、たったひとつのことですら、悩んでしまう。

第一、ライバルが親友だなんて……。

もともと、似たもの同士だった、私と恵。

夏休み明け、学校にきてみれば、同じキーホルダーをつけていた。り。

作文の内容が、一致していたり。

同時に発言したり。

そんなことを見かけるたびに、『パクリだ〜』っていつて、お互い笑っていた。

でも、好きな人まで、同じだなんて。

そういえば5・6年生のときは、恵も翔も私も、同じクラスだったし。……参ったなあ。何故なんだろう。

私はとぼとぼと俯きながら歩いていた。今日は、職員会議で午前中しか授業がなかったので、辺りはまだ明るく、蒸し暑い。

ひとりで小さく短いため息については、今日の出来事を何度も思

い出す。

「ただいまー。」

誰もいない家にむかって言う。「おかえり」はいつもなかった。

部屋に入り、汗でベトベトのワイシャツを脱ぎ、着替えると、崩れるように、ベッドに身をゆだねた。

じっとしていると時計の秒針の音しか聞こえなかった。とたんに不気味になり、家にいられなくなった。……私は携帯片手に、外へ出た。

十四章：嫉妬？

近くの公園のベンチに、どっかりと腰をおろす。この地区で、ラジオ体操が行われる場所だ。

……最後にラジオ体操をやったのは、小4だったかな。思い出に浸りながら、携帯をいじる。

『翔のことが、好きなんですよ？』

アドレスが空白の、恵宛てのメール。クリアボタンを押して、本文を消した。

(暇だなあ……)

今日、恵と遊ぶ約束はしていたものの、用事でキャンセルされた。恵とは遊びたくない気分だったから、幸運だった。

メールを送ろうとアドレス帳を眺めるも、誰とも遊ぶ気にはなれなかった。

「……ひよこ？」

後ろから声をかけられた。振り替えると……

「たち！」

急いで携帯を閉じて、少したちを見つめた。

「誰かと待ち合わせ？」

「えっと……別に。」

たちは首に白いタオルを巻き付けて、汗をかいていた。走っていたのだろうか。

「つか、ひよこって携帯持ってたんだ。」

たちは前かがみになって、私の手からシルバーの携帯を取り上げた。

「ちょっと……」

「……ずいぶんシンプルだなー。奈央なんて、ピンクのハートついてたぜ。立体的で、宝石みたいな。」

私は立ち上がり、たっちの手から、勢い良く携帯をとった。

「今、奈央っていった？」

「ああ、吉原奈央。俺と同じ、3組の。」

「へえ……奈央ちゃんの携帯、見たことあるの？」

どうせ私は、あの人みたいに、派手じゃないけど……。

「ボーリングいったんだ。3組の奴ら、8人と。そんなかに奈央がいて……携帯見せてもらった。」

男子とどこかへ遊びにいたりする経験がなかった私は、口が開きっぱなしになってしまった。

「俺さ、バドミントン部はいったんだよ。これからは、部活が忙しくて、なかなか遊べなくなるし……だからボーリングにいった。」

「あつそ。」

私はそっぽを向いた。

たっちは微妙な顔をしていた。私はこんなに、人に冷たくしたことはない。内気で、自分で言うのもなんだけど、やさしいイメージ。もしかして、気付かないうちに、猫かぶってたのかもしれない……。

「嫉妬？」

「……え？」

「たっちに嫉妬？　なんで？」

「ばっかじゃない。やっぱり気付いてない。私には……翔がいること。」

しばらく私と会話してない時期もあったのに。なんか、夢見すぎだよ。

翔の笑顔が、ぱつと頭の中に浮かぶ。ほっぺたが熱くなった。

「顔赤い……。」

無表情で、意地悪に言う、たっち。

「違う。」

「何が？」

翔と一緒にいると、笑うことができたんだ。いっぱい、いっぱい。助けて、翔……。

「……別に。」

「じゃあさ。メルアド教えて、ひよこ。」

私は黙って携帯をほおりなげた。たっちはそれを受け取ると、赤外線通信をはじめめる。

「ありがとう……じゃあな。」

場の嫌な空気を察したのかもしれない。たっちはそそくさと走り、公園から消えていった。

十五章：小悪魔・奈央

あと10日で夏休み、というときだった。

春の穏やかさは完全に消え、アスファルトから蒸気が出てきそうな程、太陽が照りつけていた。

1年生たちは、もう2カ月くらい前から、部活動を始めていた。恵は、吹奏楽部で、クラリネットというでかいリコーダーみたいなものを、担当している。

翔はというと、いつも掃除が終わると、まっすぐ帰宅していることから、きつと部活には入らなかったのだろう。

……そして最後に、たっちは……バドミントン部で頑張っている模様。

今日も私は、学校が終わると、ひとりで帰宅をする……はずだったけど。

「ひよりちゃん。」

もつとも会いたくない人物に、呼び止められた。

「一緒に帰ろうよ！」

「……あの。奈央ちゃんと私、方向違うけど。」

なんせ小学校も違うくらいだから、自宅は逆方向と言ってもいい。奈央ちゃんは『いいの、いいの』といった調子で、私の背中を押す。

本気で逃げたかった。

小悪魔・奈央。とにかく物知りで、ずるがしこく、しかし美しい。綺麗な花にはとげがある、みたいなもの。

私たちはたいして仲良くないし、クラスも違う。そんな奈央ちゃんにベタベタされると、不気味な感じ。

何か探り出したいときには、まるで便利な『道具』みたいに私を

つかう。

「ほらっ。早く歩いてよお！」

しかもこの人、1年のくせに、スカートが短い。すでに多数の先生・先輩から目をつけられている。しかし本人は、『大丈夫、ボディガードがいるから』と、写真を私に見せ付ける。

3年の、工藤雅也という、イケ面だった。彼氏だと言う。

本人いわく、『全然好きじゃない』らしい。……よく、軽く言えるな、と思った。

工藤雅也さんに、同情。

「ねえ、ひよりちゃんは、好きな人とかいる？」

玄関で靴をはいていると、奈央ちゃんは堂々と聞いてきた。

「別に……。」

「嘘でしょ？ 顔、赤いよお？」

奈央ちゃんに秘密を握られたら、本当に困る。

でも、はたしてこの小悪魔に勝てるのだろうか？

「実は私には、いるんだけどね？」

え？ 工藤雅也さんは……。

「その人、実は……。」

じっと私を見つめる。奈央ちゃんは背が高いから、普通に見つめているだけでも、まるで見下しているような感じ。その後、不気味に微笑んだ。

「……ねえ、携帯持つてる？ マアド教えてよ。」

いきなり、話題をかえた。さっきの話題の続きが気になって、聞き出そうとしたけど、雰囲気的にダメだった。

夜7時。ベッドの上でうとうとしていると、今、CMで話題のメロディーが、短く流れた。

(メールか……。)

携帯を開くと、知らないアドレス。メールを開いた。

『奈央だよ。彼氏いないひよりちゃんのために、男の子を紹介！』

大体、こんな感じの内容。出会い系サイトの宣伝かと思ったけど、メールの最後に名前が。

『堀内ユウスケ』

十六章：ユウスケ

メールのおかげで、眠気が一気に吹き飛んだ。いそいで返信メールを打つ。

私は左手でメールを打つため、空いた右手は興奮からか、ベッドのシーツを握り締めていた。

『堀内ユウスケって誰？』

送信すると、1分程で返ってきた。

『明日、紹介してあげる！』

私に男子を紹介、だなんて。一体この人、何考えてるの？

翌日。緊張ぎみで、少し早めに、学校に登校。

いつも遅刻ぎりぎりに学校に行く奈央ちゃんが、今日は玄関で待ち構えていた。

「おはよう！ ひよりちゃん。」

私が上靴を履くなり、奈央ちゃんは私の制服の袖を引っ張る。

「ユウスケ君は2組だからね！」

私は奈央ちゃんに引きずられるように、2組へ。

2組は、確か翔がいるクラスだ……。

「ユウスケー！」

奈央ちゃんが教室の外から、2組を覗き込むようにして、叫ぶ。教室内には翔もいて、目はあわせないようにしたけど、少し恥ずかしかった。

「あ、奈央。」

そう言っユウスケの名に反応したのは……イケ面だった。

多分学年で1、2を争うぐらいのカッコイイ人。たびたび4組で

も、影で『ユウスケ』という名が飛びかっていたのを思い出した。

噂話に鈍感な私でも、たえず『ユウスケ』という人物が、誰かと付き合っては別れ……を繰り返していることを知っていた。

ようはモテるんだ。

「君が管野ひより？」

気付けば目の前にいた。私は黙って頷く。

「俺、堀内佑介。奈央とは同じ小学校でさ……これから、よろしく。」

やさしい言葉使いに反した、やる気の無い表情。

『なんだ、こんな女か。』

なーんて、思ったのだろう。

どうせ地味で可愛くないけど……失礼な態度。

「じゃあね、ユウスケ君ッ！」

奈央ちゃんが変に可愛い声で、堀内ユウスケにアプローチを仕掛けていた。

私、どうなっちゃうんだろう……。

十七章：小悪魔の罠

気付けばもう、夏休みにはいつていた。

本当は、喜ぶべきなのかもしれない。けど、最近は笑えもしなかった。

皆が皆、一体何を考えているのかわからない。奈央ちゃんなんか特に。

考え事をしながら、ベッドにねっころがっていると、メールの着信音がした。

壁時計を見ると、11時。いい加減、起きて着替えなくちゃと、布団を押し退け、携帯を手に取った。

画面を見て、送信者確かめる。堀内ユウスケかと思ったら、なんとたちだった。

たちには、メアドを教えたはいいものの、まだメールがきたことがなかったので、びっくりした。

『おはよう。今日、神社で祭りあるんだぜ。知ってた？』

『あ、お祭り、今日だったんだ。』

毎年、夏休みの中頃、近くの神社でお祭りがある。今年は誰からも、一緒に行こうという誘いはない。

『ひよこは誰かと、行く？』

『予定無し。』

それから、たちからメールが返ってこなくなった。……放置？
かわりに、あの人からメールがくる。

『よつ。とりあえず登録よろしく。堀内佑介』

堀内ユウスケからメールが……奈央ちゃんが私のアドレス、教えてたのかな。勝手に教えちゃうなんて、奈央ちゃんらしい。

それになんか、文章がそつけない。普段から、こんな感じなのかな？ 無理矢理メールするように言われてるみたい……。

とりあえず、堀内ユウスケのメアドを登録すると、もう一度ベッドに寝転んだ。

と同時に、着信音。

（また？）

少しイライラしながら、携帯を開く。

『ひよりちゃんは、誰とお祭りいくのっ？』

奈央ちゃんだ。

『わかんない。』

『じゃ、Kストアに2時、待ち合わせね！』

勝手に話をすめられ、近所のKストアというスーパーに待ち合わせとなった。流れるに、お祭りにいくのだろう。

最初は面倒だとか、お金がないという理由で断ろうとしたけど、やっぱり時間がたつと共に、ワクワクしてきた。

お気に入りの服をきて、髪を結んで、銀色のかっこいいサンダルを履いた。お気に入りのコーディネート。

（なかなかじゃん。）

ちよつとナルシストになりながら、玄関を出て、自分の自転車に乗った。

慣れた道をくねくねとまがりながら、Kストアに向かった。

白い背景に、赤い字で

「K」

と書いてある看板を見て、もう奈央ちゃんはあるかな？ と思わず考えた。

「おまたせー！」

自転車で突っ込み様に、爽やかにそういった。

人影がちらりと見えたので、先に来てたんだな、と思ったからだ。

「あれ？ 奈央は？」

「は？」

……しかし、その人影は、奈央ちゃんではなく、ユウスケだった。

「あ、そっか。奈央ちゃんは待つより待たせるタイプだからねー…

…。」

「一緒じゃないの？」

私は黙って頷く。

「はあ……。」

ユウスケはため息をつきながら、ズボンのポケットから携帯を取り出し、電話をかける。

奈央ちゃんにかけたんだな、と思い、奈央ちゃんの声が聞こえるように、ユウスケに近付いた。

「もしもし？ 奈央？」

「あ、ユウスケくうくん！ うん、奈央だよあ！」

男子の前では声が変わるみたいだ……いわゆるブリッコ？

「どついう事だよ……待ち合わせて、奈央は今……。」

別に、ユウスケ君と会う約束はしてないけどあ？ ただ、ひよりちゃんとの待ち合わせ場所を教えただけ！」

この人は、私とユウスケをくつつけるために、努力をしているんだろうか。

ユウスケの声が、怒りで少し震えている。

「あ、もしかして、夜のほうがよかったあ？」

「ふざけんな。」

「ま、いいじゃん。せっかくだから、2人でお祭りいきなよ！」

ユウスケは、電話を乱暴に切った。

「もういい。いこうぜ。」

私はユウスケに左手をつかまれ、結局、2人で祭り会場に行くことになってしまった。

十八章：祭り

昼間なのに、すごい人ばかり。知っている人がいなければいいな、と思うも、なんせ神社のまわりには、ごろごろ同級生たちが住んでいる。

ユウスケとの2ショットを誰かに見られたら、途端に噂が広まって……そしてその噂は恵や翔の耳へ！

私みたいな『静かな人』が、男子と、それもユウスケと、手を繋いでお祭りに……手を繋いで！？

「うおっ。」

ユウスケから小さな声が出た。私が急にユウスケの手を振り払ったから、びっくりしたのだろう。

「あ、ごめん……。」

「いや、別にいいけど。」

場に変な空気が流れる。このお祭りには、ユウスケの『うさばらし』のために来たようなものだ。

こんなところに目的もなくつつ立っていて、誰かに見つかったも困るので、もう帰ろうかと思っていた。

「……射的やりてえ。」

しかしその矢先、ユウスケの我儘で、いろいろな屋台を廻ることになる。

当たった景品などは、なぜか全て私の元へ。

「ちょ……ユウスケッ！」

「あ、ユウスケって呼んだの。」

「う、うん……あのさ、私もうお金持ってないんだよね……。」

祭りに来てから、1時間程たっていた。

抱えている景品の量からすると、お金がなくなるのも当たり前前の

ように思われるけど、これらは全てユウスケの出費。
私はまだ食べ物しか買っていない。

「は？ 何円持ってきてたの？」

「1000円……。」

「祭りだぜ？ もうちよつと持ってこいよ。」

去年は500円しか使わなかったから、まさか足りなくなるとは
思っていなかったのだ。

「まあいいや。何食べたい？ おごるから。」

「焼そば……。」

ユウスケは、意外とやさしいことがわかった。
おどおどしている私をリードしたりして……。

「ああ〜！ 見つけ！」

「奈央！」

突然声がして、ちよつと驚きながらも、ユウスケの発言を聞いて
苦笑した。

やっぱり来てたのか……そう思って奈央ちゃんを見ると……隣に
は奴がいた。

十九章：疑惑

露出度が高い奈央ちゃんの私服に、ただ一言、『流石だね』と言っ
ておいた。

奈央ちゃんが身にまとっているものは、全てと言っていていくらい
に光り輝いている。

しかし隣の奴は……黒のジャージ上下。これが私服？ 小学生の
ときと、かわっていないような……。

ユウスケと見比べてみる。精々ジャージ上下が私服として許され
るのは、小学校までだ。

なんか、いかにも体育会系って感じ……。

「ひよこ……メール放置して、すまん。」

「べ、別に、気にしてないけど……。」

私としては、奈央ちゃんとたっちの2ショットのほうが、気にな
った。

「何？ 2人、付き合ってるの？」

……びくっ。

今、たっちと奈央ちゃんが、つつつ、付き合ってるって!?

「何言ってるんだよ、そんなんじゃないし!」

たっちが慌てて、交際疑惑を否定している。

……私たちがまだ、中学1年生だよ!？ 付き合うとか、早すぎな
い？

……まさか私が遅れているの？ ユウスケは、もう何回も『交際』
したことがあるらしいし、奈央ちゃんにも一応、工藤雅也さんがい
るし……。

でも、それにしても、『おしゃま』すぎない!?

「そうだよ、ユウスケ君ッ！ 私たち、ただ2人つきりで、お祭りに来たただけだし！ ユウスケ君とひよりちゃんだって、そうでしょ？」

「あ、ああ……。」
まわりのお客さんたちが、邪魔そうに、冷たい視線で私たちを見ている。

通路のど真ん中で話しているからだった。

「ね、ねえ、みんな。ここは邪魔だし、移動しない？」

「……あ、やっぱりひよりちゃんって、気遣いできる人だね！ ……でもいいよ、私たちはもういくからさ。じゃあね！」

奈央ちゃんは小さく手を振ると、たっちの腕をつかみ、人だかりに消えていった。

「さて、俺たちはそろそろ、帰るか。」

「……うん。」

ユウスケの一言で、私たちはお祭り会場を出た。会場を出た途端に、辺りがさつ……と、静かになる。

私たちは、自転車が置いてあるKストアまで、歩いた。

「なあ。」

ユウスケが突然、話し掛けてくる。

「何？」

「あいつら、交際疑惑、否定してたけどさ。本当のところ、どうなんだろうな。」

私はただ頷いただけだったけど、そんなのは2人にしかわからな
い、というのが答えだった。

二十章：それぞれの変化・1

「奈央ちゃん……変わったねえ。」

夏休みもあつという間に終わり、学校も始まった、9月のなかば頃。ケイ先輩と廊下ですれ違ったときに、寂しそうに耳打ちされた。私は、ただ『はい』としか言えなかった。確かに奈央ちゃんは、最初は清楚でお嬢様みたいなイメージがあつたのに、今ではすっかりギャルみたいだ。

あれが本性、なの？

「ねえ、奈央ちゃん。」

「なに？」

廊下の真ん中に突き出た柱に、奈央ちゃんは隠れるようによしかかっていた。私は勇気を出し、話し掛ける。

「奈央ちゃんって……だいぶ変わったよね。」

「は？」

綺麗な薄桃色のつめに、唇。ラメがはいっている。目の周りはずきり目立つほど黒く、まつげは長い。……スカートは中が見えてしまいそうなほど短く、ワイシャツのボタンははだけ、中からは十字架のネックレスが見える。

そして、手元には携帯が握られている……。

「いや、その、だから……最初会ったときは」

「さっすが私の親友って感じ？ 皆が言えないこと、堂々と言っちゃってさっ。」

奈央ちゃんはいたって明るく振る舞うと、さらに私に問い掛ける。

「ひよりちゃんは今の私と昔の私、どっちが好き？」

「ど、どっちって……」

強いて言えば昔の奈央ちゃんだけど、そんなことを本人の前では

言えない……。

「あ、ギャル嫌い？ うんうん、わかった。」

黙り込む私を見て、ひとり勝ちに納得している奈央ちゃん。

奈央ちゃんは軽く手を振ると、どこかへ去っていった。もし

かして、傷ついた？

平気なフリして、実はショックだったのかも。

少し後悔しながらも、夕方頃には、すっかりそんなことも忘れていた。

翌日。

「おはよう。」

朝、登校し、4組の前へいくと

「奈央ちゃん!？」

そこには、最初会ったときの、清楚な奈央ちゃんがいた。

化粧バリバリだった顔は消え、元通りのハリのある白い肌が。

ギリギリまで短かったスカートは、膝下まできている。

えりは正され、腕にも時計しかつけていない。

「どうしたの!？」

「元に戻しただけ。」

奈央ちゃんはサラリと答えるが、周りの人も、ポー然としている。

「もしかして、昨日私があんなこといったから？」

「ノー、ノー。直接的にはそうだけど、ひよりちゃんのためにやったわけじゃないしい。」

言っている意味がよくわからない……と思いつつも、ある意味

本人にとっても、いい傾向のハズ。

少し嬉しくなった。

「あっ、そうだ。」

「あつ、そうだ。」

奈央ちゃんが何かを思い出したかのように、1回私から遠退いたかと思うと、また近づいてきた。

「工藤雅也を、今日、ふる予定。」
そういうと、何事もなかったかのように、去っていった。

『元に戻しただけ。』

奈央ちゃんの言葉が、何度も頭の中を駆け巡っていた。

確かに言葉では、一言ですむけれど、私が知りたいのは、なぜ元に戻したのか、ということだった。

「ひより〜？」

恵が、私の肩を揺さ振った。私ははっとして、後ろを振り向く。

「もう授業、終わったよ？」

「あ、うん。」

奈央ちゃんのことを考えるのをやめて、恵と一緒に、たわいもない話をする。

恵には、翔の話を聞いてから、そっけなくしてしまったけれど、今ではもうすっかり、元通りの仲良しになっている。

本当は、翔のことをどう思っているのか、聞きたいけれど……もし、恵が翔のことを好きだったら、もう翔のことは、諦めなければならぬような気がして、聞けない。

「あ、モテ男。」

恵がパタリと話をやめて、3組の入り口のところに立つ、ユウスケを見た。

「ユウスケ〜！」

私もつられて見て見ると、クラスのうるさい女子たちが、もうユウスケの周りに群がっていた。……そしてその光景を、じっと見つめる恵。

恵だったら、まさかユウスケのことが好きなの！？

二十一章：それぞれの変化・2

恵に怪しい視線を送りながらも、ユウスケのほうを見る。

周りに群がっている女子達は、ユウスケに見事に、シカトされていた。

「えー、1年4組、管野ひよりさん？」
ギロリ。

ユウスケの台詞が終わるとともに、私は女子達から睨みつけられた。

「よ、呼んでるよ？ ひより。」

恵が顔を引きつらせ、こっちを向いた。

そういえば恵は、私とユウスケが、知り合いだということを知らなかった。

「うん。行くね。」

席から立ち上がり、無表情でユウスケの元へと駆け寄った。

「よっ。」

「何か用？」

私の対応に、冷てえな、とユウスケは苦笑い。

私だって、ユウスケの取り巻き達を、敵にまわしたくないから、こんなに冷たくしてるんだ。

「音楽室行くか。」

2人で話していても、女子達がいつこつに離れようとしないので、私たちは場所をかえて話すことにした。

ボタン。

音楽室の扉が閉まり、廊下で騒いでいる生徒の音が途絶えた。
静かだな……。

「あのさ。」

突然ユウスケが、口を開いた。

「放課後、体育館にこれる？」

「え？」

「いや、だから」

「だってユウスケ、部活は……？」

ユウスケは、男子バスケットボール部にはいつていた。

「毎週水曜日は、体育会系の部活は休みでさ。どの部活も、体育館使わないから。」

そんなこと、知らなかった。親友の恵も、ケイ先輩も、菜々美先輩も、みんな吹奏楽部だし、奈央ちゃんは帰宅部だし。

あ、たっちはバドミントン部か。

「そうなんだ……じゃあ、今日は部活休みなんだね！ わかった。

放課後、体育館行くから。」

話があるなら、今話せばいいのに……と思った途端、チャイムが鳴った。

「ヤバイ、次の授業、移動教室だ！ じゃあな！」

そう言って慌てて走っていくユウスケの後ろ姿を見て、思わず笑ってしまった。

放課後。

約束どおり、体育館へむかう。みんな玄関へむかっているのに、私だけ、逆方向に歩いている。

廊下で、音楽教師とすれ違い、目が合ってしまった。勝手に

体育館にはいったところが見つかったら、怒られる。

そんなことに、今頃気付いた。

不安が表情に出ないよう、平然を装いながら、1階の女子トイレの前を歩き、体育館へはいった。

「うわっ！」

目の前を、バスケットボールがかすめた。

ユウスケがひとりで、シュートの練習をしていた。制服のブレザーと、ネクタイをとって、ワイシャツの第1ボタンをはずした格好をしている。

「お、きたか。」

跳ね返ったボールは、まるで意志を持っているかのように、ユウスケの手に戻っていった。

「まあ適当に、そこらへんにいてくれよ。」

「うん。」

私は、壁にもたれかかって、黙ってユウスケの姿を見た。ドリブル、シュート、ドリブル、シュート……格好つけてるように見えるけど、ユウスケに技術があるのは確かだ。とても1年生とは思えない。

「ユウスケ、すごいね。」

気付けば、口に出して言っていた。ユウスケはドリブルをやめ、ピタッと停止した。

「そんなことねえよ。ま、3年生がいなくなっただけから、練習に力を入れてきたけど。」

夏休み中に、どこの部活も、3年生が引退していったらしい。

「そろそろ話すかな。体育館にいること、先生にばれたら、ヤバいし。」

ユウスケが、ドリブルをしながら私の正面へときた。

私は、ユウスケの真剣な表情に、体がかたくなる。

「奈央……のことなんだけどさ。」

ユウスケが重々しく口を開く。うつむいているせいか、表情が暗く見える。

「あいつ、昔っから、ピンクとかキラキラとか、派手なものが好きでさ。中学はいりたては、まだ本当の姿があらわれてなかったけど。」

ユウスケはため息をつく、また話しはじめた。

「だから、あんなに変わったのを見て、驚いた。あいつ、人に流されてんのかも知れない。寂しがり屋だし。　　だけど……。」

ユウスケはぱつと顔を上げると、私の手をとった。

「あいつ、きつとひよりが、初めての友達だと思っんだ！　だから、自分勝手な奴だけど、友達でいてやってくれ！」

初めての友達　　奈央ちゃんが女子と一緒にいるところ、確かに見かけたことはない。

ときどき女子と話しているところは見たことあるけど、それほど仲は、よくないみたいで……　奈央ちゃん、独りぼっちだったんだ。

「うん、そんなの当たりま……ゴホッ。」

風邪気味で、声がかすれていたことを、思い出した。　　苦しい。

「大丈夫か？　ほら……。」

ユウスケはすつと、ズボンのポケットから、のど飴を取り出した。オレンジの絵が、描かれている。

「あんまきかない、軽い奴だけど。」

「ありがとう。」

ユウスケから飴を受け取り、口に入れた。　　甘酸っぱい。

「なんか……ごめん。くだらねえことと呼んだりして。奈央には、タダのおせっかいだよな。」

「ううん！　ユウスケは、奈央ちゃんのことちゃんと考えてるもん！」

くだらないことだなんて、本当に思ってたなかった。奈央ちゃんのことを一番考えてないのは、奈央ちゃん自身なんじゃないかな、なんて思っていたりもした。

「センサーに見つかったら、大変だぜ。早く学校でないと、チャイム鳴っちゃう。ほら。」

ユウスケが私を急かすように、背中を軽く2回たたいてきた。「先に帰ってろ。」

「何言ってるの、ユウス」

私の言葉は、ユウスケの声によって、かき消された。

大きく白い体育館の扉が、ギシギシと音をたてながら動く。

体育館の外へ突き出された私は、しばらく閉ざされた体育館の扉を、見つめ続けた。

二十二章：それぞれの変化・3

『何言ってるの、ユウス』
『巻き込みたくないんだよ。叱られるのに、2人も必要ないだろ！』
そう言っつてユウスケは、体育館の扉を閉めた。

私はしばらく扉を見つめた後、玄関へと足を進めた。重い足音が、一定のテンポを刻んでいる。

しばらくすると、そのテンポにあわせるように、革靴の音がまじる。

(……近藤先生。)

眉間にシワをよせ、厳しい表情をしている先生が、正面からこっちにむかってくる。

私も負けじと『厳しい表情』をする。

「君。もうすぐ下校時間だ。早く帰りなさい。」

「……はい。」

先生は私の前で一旦停止し、またコツコツと歩き始めた。体育館のほうへ去っていく後ろ姿を、しっかりと確認する。

(どうしよう……。)

誰もいない廊下で、ひとり立ちすくんだ。先生をうまく足止めすれば、もしかしたら……ユウスケは先生に見つからずに、体育館を抜け出せるかも。

もし、体育館にいるところを、見つかったら。勝手にボールまでつかってしまったし、もしかしたらユウスケ、部活を退部!?

(心配しすぎ、かな。)

さつき体育館を出るとき……本当は、ユウスケと一緒によかった。誰もいない学校で、ユウスケと肩を並べて歩きたかった……なぜだろう? 一緒にいたいって、なんで思ったんだろう?

……口の端には、まだ小さなオレンジの固まりが残っていた。

結局、後戻りはしなかった。足が妙に重く、引きずるように、道を歩く。

ユウスケは、どうなったんだろう。先生に見つかってしまったのかな？

私はただ、ユウスケの言うことを聞いたただけだけど……なんだか物凄く罪悪感があった。

家に帰った私は、さっそく携帯を開いた。

電話帳からユウスケの名を選び、メールする。

『ユウスケ、大丈夫だった？』

すぐに返事は帰ってこなかった。もどかしくなって、棚から漫画を取り出したり、適当にお気に入りのサイトをまわったりしていると、メールが届いた。

『全然大丈夫じゃないけど、大丈夫！』

『意味わかんないよ！？』

ユウスケの返事を見て、ひとりで微笑む。

ほっとしたんだ、ユウスケがいつもと変わりなくて。……よかった。

『いや〜センサーに見つかっちゃってさ！でも、部活のとき忘れ物したんで、取りにきました。……って、言い訳したけど！』

『そっかあ〜。それじゃあ、あんまり怒られなかった？』

『ああ！』

『あはは、ユウスケって言い訳うまいね！』

それから少し、ユウスケの返事に間があった。次に、どんな話をふってくるのかな？

『ひよりって、好きな人いんの？』

この内容、はつきりいつて予想外……。

答えようか、秘密にしておこうか　　って、言えるわけないじゃん！

『ユウスケはどうなの？』

ならばこつちから聞き返しちゃえ、とメールを送った。

『俺はいるけど。』

いるんだ。

わかってるよ？　なんとなく。

『奈央ちゃん？』

そこでメールは終わってしまった。

私はベッドに倒れ、髪をいじりながら考え事をした。

私の好きな人は、翔……のはず。

でも、最近なんか変。翔の事、考えてたっけな？

奈央ちゃんにユウスケを紹介されて、それから　　お祭りいっ

たり、話しあったり。最初はそっけなかったけど、だんだん仲良

なって……。

翔とは、一緒にお祭りいったり、2人つきりで話したこともない。

だけど、翔のことが好き　　ユウスケなんか。ユウスケなんか好

きじゃない！

でも、実際、ユウスケは好きじゃないって思ったたびに、ユウスケ
のこと考えてるじゃん！

もしかして……私、いわゆる純愛ってものがしたかったのか
な？

最初、ユウスケのことは、ろくな男じゃないなって思ってた。い
ろんな人と付き合っては、すぐに別れて。遊んでばっかりいるんだ
なって　　。

でも、本当に好きな人が今付き合ってる人じゃなくなってしまうたら、すぐに別れるべきだよね。

好きでもないのに、付き合い続けてる男こそ、ろくな男じゃないよね。

本当に2人が、互いのことを好きでいて、初めて『純愛』だよね。

私、ムリして、翔のことが好きっていう気持ちを、継続させようとしていたのかも……。

「ひよー！ 夕飯できたよー！」

「はーいー！」

私の気持ちは、知らぬ間に変化していた。

二十三章：ナルシスト

腕を組んで、自分の体をさすった。秋の気配が、冷たい風から感じられた。

(ジャンパー着てくればよかった……。)

制服のブレザーの裾を、思いつきり引っ張った。肩が変に強ばって、学校の玄関のガラスに映った自分を見て、少し笑ってしまった。

昨日のメールの続き……ユウスケの好きな人の話。……聞こうかどうか迷っていた。

朝早く、人が少ない学校。放課後のような、寂しい雰囲気がある。当然、恵もないし、奈央ちゃんもユウスケもない。

そう思ってたのに 私は2組を覗き込んだ。絶対にいるはずはない、けど……ユウスケの姿があるかもしれない。なんて矛盾を、考えながら。

確かに人影はあった。でも、そこにいたのは……翔だった。私は、思わず声をもらしそうになった。

翔と一瞬目が合い、そして何事もなかったかのように、すぐに離れた。

そらしたのは、どちらからと言うわけでもない。ほぼ同時に、視線をはずした。……黒板に、『杉本』『黒川』と名字が縦に書いてあるのが、見えた。

(翔、日直かあ。)

じつと黒板を見つめ続けても、沈黙しかない。……とても耐えられない。私は気付かないうちに、ものすごい力で、ドアを握っていた。汗ばんだ手をはなし、私は2組から立ち去った。

本当は少し期待していた……話し掛けてくれるかもって。

でも結果的に、翔にとって私は、ただの元・クラスメイトでしかなかった。

私だって、好きでもなんでもない男子　青山とか、松村とか、そんな人たちは気に掛けたこともない。……それと同じ。翔が私のことを何とも思っていないのは、私がただの元・クラスメイトだから。

「ひより〜！」

下を向きながら2組から出てきたところを、呼び止められた。

「ユウスケ！」

自分の顔が明るくなったのが、わかった。ユウスケは、笑顔で私に近づいてきた。

近くでユウスケを見ると、ワイシャツの第1ボタンが外れているのがわかった。それだけではなく、ワイシャツがブレザーから出てしまっている。　だらしない……けど、これがちよい悪？

「なんだよ、今日は朝早いんだな。……あ、おはよーっ！　翔。」

教室から出てきた翔に、明るく挨拶をし始めたユウスケ……だ　　けど翔からは、ぶっきらぼうに『おはよう』と返されていた。

「あいつ、いい奴だから、仲良くしたいなーって思ってたりしてん　　だけど、さ……。」

ユウスケは、翔が遠くへ行ってから、小声で、苦笑しながらそう　　言った。

つまり、翔からは、あまりよくは思われていないらしい。……翔　　は結構マジメなタイプだから、ユウスケみたいな人は、受け付けな　　いのかも……。

「女子に好かれるのなら、簡単なのにね。」

そうユウスケに嫌味を言うと、本人は頷いて、納得してしまった

……。

「男子にかつこよさは通じないしな。」

「は……？」

この発言には、私も思わず硬直してしまふ。

本人はそれに気付いていないのか、気にしていないのか、話を続けた。

「俺の好きな奴には……通じると思う？」

「何？ ユウスケの、外見が？」

ユウスケは真剣な表情をして、頷く。

奈央ちゃんにねえ……。ちよつと前、私には好きな人がいるって、宣言はされたけど。

「そんな質問するなんて、ユウスケって、おもしろいね……。」
とりあえず言い訳。

「おもしろいかどうかはともかく、俺は、通じないと思う。」

「どうして？」

「出会ってから今まで、多分一度も、俺のことを恋愛対象だと思っ
てない。」

その日の放課後、私は奈央ちゃんと話した。

私がさつさと家に帰ろうとしているところを、奈央ちゃんが横切ったのだ。

「あつ、待つ……奈央ちゃん！」

奈央ちゃんを必死に追い掛けるあまり、自分の靴ひもを踏み、転びそうになった。

「ひ・よ・り・ちゃ〜ん。そんなに必死に私を追い掛けるなんて、
珍しいんじゃない？」

奈央ちゃんはクスリと笑うと、私の肩をポン、と軽く叩いた。

「まあまあ落ち着いて。話があるの？」

私は大きく頷いた。奈央ちゃんの印象が、また少し変わった

気がする。

「それなら、屋上に行こう？ 静かだから、あそこは。」

「屋上……？ 屋上は、一般生徒は立ち入り禁止だよ？」

私の言葉に、奈央ちゃんは得意気に笑ってみせると、ブレザーのポケットから、鍵を取り出した。

「私は、一般生徒じゃないもの。……今の彼、生徒会長なのよ。」

生徒会長の彼女だからって、どうして屋上の鍵を持つてるのだろう……まるで、『社長夫人』。

私は黙って、奈央ちゃんについていった。……奈央ちゃんには不可能なんてないんだ、と思いながら。

初めて屋上にはいった。……本当なら、一度もこないはずだった場所。

「奈央ちゃんの好きな人、生徒会長だったの？」

「そんなわけないじゃん。ただ、眼鏡っ子もあーかなあ〜って。」

奈央ちゃんが無表情で、ただ遠くを見つめていた。……なぜだか、悲しい顔してる。

「ねえ、奈央ちゃんが紹介してくれた、ユウスケだけど……。」

「飽きた？ ……確かにユウスケ君、ナルシストだもんねえ〜。」

「いや、飽きたとかじゃなくて。」

私が呆れ口調で言うと、奈央ちゃんは笑ってこつちを見た。

「安心して。私、ユウスケ君には興味ないから。」

私がユウスケのことが好きなんだって、感付いたかな？ でも

ユウスケは、好きなんだよ。奈央ちゃんのこと。

「……ユウスケ君だって、私には興味ないよ。」

すれ違いざまにそう言うと、奈央ちゃんは屋上から出ていった。

一人取り残された私は、複雑な気持ちで空を仰いだ。

二十四章：相性

さんざん迷った末、白い紙に青いペンで、書くことにした。

大嫌いな数学の時間、私は先生の目を盗み見て、ユウスケ宛てに手紙を書いた。

『放課後、部活が始まる前に、2階の会議室に来て！ ひより』

私はその手紙をポケットにしまうと、休み時間、恵と一緒にユウスケに会いにいった。

「いつのまに、友達になっちゃったの？」

「はい？」

「その……“なんとかユウスケ”って人。」

廊下を歩いていたとき、恵が、唇を尖らせて小さく言った。……これは、カッコイイ男友達がいることに対しての、嫉妬？ それとも、ユウスケがだらしないから、どうしてもひよりたいなタイプと一緒にいるの？ ってことかな。

「堀内佑介だよ……。あの、実はいろいろあってね……」
軽く溜め息。

「……あ、ひより。いたよ！」
恵が指差したほうを見ると、そこには確かにユウスケ と、翔が。

……もう。何、あの異色のコラボは！ そう思いながら2人を見ると、翔はユウスケと話しながら、険しい顔をして、眼鏡を触っている。

一方ユウスケは、なんだか苦い笑いを浮かべている。翔に向かって、必死に手を合わせたり……

「あ、ちよっと！」

恵は恵で、2人に向かって走り出す。……目的は、翔だけだと思っただけ。

翔が絡むと、恵の行動力はすごいなあ。ユウスケに手紙を渡すって言ったときは、ものすごく面倒そうな顔をしたのに。

「ひより早くおいでっ！」

いつものおっとりした恵はどこへ……まあ、走るスピードは、相変わらず遅いままだったけど。

私は小走りして、恵の隣に並ぶ。……目の前にいる2人は、私達がこんなに近くにいるというのに、話し続けている。

「なっ。お願いします！ どうにかかない？」

「俺にだっているいろいろ予定があるし……さっきから、その日は塾って言ってるだろ？」

翔は眉間にシワをよせ、冷たく低い声で、ユウスケに言葉を返している。

「じゃあ、塾の無い日に……。」

「もっと具体的な日付を言ってくれ。……いや、はっきり言うと堀内と遊んでいる時間がない。悪いが、違う奴と行ってくれ……ひよりとか。」

翔の態度が、嫌に冷たい。自分の嫌いな人と好きな人じゃ、こんなに接し方が違うなんて。

しかも話を、たった今自分の隣に来た、私にふるなんて。

「な、何言ってるんだよ、翔！ 俺は……。」

ユウスケが口ごもった……流石のユウスケも、今の言葉は傷ついたのかな？

顔を真っ赤に染めて、震えている。

「どうしたの翔。何があったの？」

恵は翔に問掛ける。

どうしたのって……状況を把握したいのはわかるけど、それってただの野次馬って言うか……翔に話しかけたいだけって言うか。

「別に……いや。ごめん、堀内。」

翔は一言だけ言葉を残すと、教室の中へ消えていった。

私は、翔が教室にはいつていく間に、ただその場に立ち尽くして
いるユウスケの手を取り、手紙を握らせた。

「あとで読んでね、ユウスケ。……どしたの？ 大丈夫？」

「あ、大丈夫。」

ユウスケはまだ、顔を赤くしている。

すごく、ショックだったんだ。なんか、私も、翔の態度に失
望しちゃったし。

確かにユウスケは、女好きだけど……翔はきっとそれを知っていて、
わざと私の名前を、使ったんだ。

「あいつと仲良くなりたいたいんだけどなあ。」

溜め息まじりに、ユウスケが呟いた。

「頭いい奴って、誰でも真面目で、一緒にいると居心地悪いつて思
っていたんだけど……あいつと話すと、盛り上がるんだよな。なん
てゆーか。」

そういえばユウスケ、男友達少ないもんね、と心の中で言った。

「……諦めようかな。翔もなんか、俺のこと、嫌がつてるみたいだ
し。」

「うん、私も友達、紹介してあげるから。元気出しなよ！」

翔のこと、ものすごく優しい人だと思ったのに……好きな人に優
しくするのは当たり前。嫌いな人にも優しくしてくれるのが、優し
い人なんだよ、翔。

「友達？ 誰？」

「……その前に、ユウスケは馬鹿？」

ユウスケは私の問いに、『馬鹿ではない』と即答。……ではない、
か。

「けど、馬鹿な奴、結構好きかも。」

「あ、ならねえ。1人いるよ。……か。」

わはら。

「どうした？」

「いや……1人じゃなかった、2人いた。河原って人と……」
言おうかどうか迷いつつ、結局、口を動かした。

「たっち。」

そう言えば、恵はどこへ行ったかな、と辺りを見渡した。……2
組で翔と、話していた。

二十五章：赤い糸

「たっち。」

私が一言そう言つと、ユウスケは面白いくらいに、食い付いてきた。

「た、タッチ!?!」

「いや、あの、触る方じゃなくてね?」

ユウスケは少し興奮気味に、鼻息を飛ばしている。

「誰それっ。ぜひ紹介してくれ!」

正直こんなに、ユウスケがたっちに興味を持つと思ってなかった……最近、たっちとは話してないのに……。紹介とか無理!

「そ、そんなことどうでもいいの! ほら、私、手紙を届けにきたの!」

うまく……とは言えないけど、話をそらすと、ユウスケは「手紙?」

と言いながら、自分の右手をゆっくりと開いた。

「そう、それぞれ。……あ、もうそろそろチャイムなるよ!?!」
「へ?」

ユウスケの返事を待たずに、恵を置いていったことも忘れて、走って教室に帰った。

教室に滑り込むようにはいり、自分の席につくと、ふっと溜め息をもらした。

……たっちはお祭りのとき、奈央ちゃんの隣にいたわけだし……ユウスケだって、ライバル心を少しは持っているはず。紹介なんて、無理に決まってるじゃん。

第一、たっちとはもう、話す程の仲じゃないし……あ、自分で

言っておきながら、何考えてるんだろ、私！

……放課後。

会議室に行くと、そこにはすでに、ユウスケがいた。

「ごめん、待たせて。」

「いや、そんなに待ってねえし。でもひよりに呼び出しされるなんて、初めてだな！」

ユウスケは口を開けて笑ったあと、急に真剣な顔をした。

「……で、何の用？」

その場に沈黙が流れ、空気ははりつめた。

「そ、その、私」

顔が赤くなる。

言う前から、ユウスケに感付かれてしまったかも。

「ユウスケのことが、好き……。」

言った後も、沈黙しかなかった。うつむいた顔を、ゆっくりと上げてみる。

……そこには、私と同じように顔を赤くしたユウスケ。

「ごめんっ！ 私、なんとなくわかってた。ユウスケの好きな人は、奈央ちゃんだって。」

なのに。

私は告白してしまった……。

翔に対して出せなかった勇氣。河原との約束。

「違うし。」

ユウスケが力強く言った。私は、一瞬間の中が真っ白になった。

「俺の好きなのは、ひよりだ。奈央じゃないっ！」

「え？ う、嘘！」

涙が出そうになった。だって、夢みたいなんだもん。ユウスケが……私のこと好きだったなんて。

こみあげそうな感情を押さえて、私は静かに笑った。

「唯一、翔だけは、俺の気持ちを知ってたんだ。だからさつき、わざとひよりの名前を出したんだよ、アイツ。」

ユウスケが照れ笑いを浮かべながら、教えてくれた。だからさつき、ユウスケは顔を赤くしてたんだ。

「そうなんだ……。私、翔を勝手に、酷いヤツだと思ってた。」

「言っただろ？ いいヤツだって！ ……冷たいけどな。」
お互いに笑い合う。

私は本当に幸せだった。この日から、私はユウスケの彼女。

ユウスケは私の彼氏。

「俺たち、両想いだったんだなあ。……もしかして、赤い糸で繋がってたのかもな！」

ユウスケが左手の小指をつき出す。

「え、何言ってるの！？ ロマンチストじゃん。」

そう言いながらも、私も左手の小指をつき出し、ユウスケの指に絡めた。

私達は、赤い糸で結ばれてる。

二十六章：友達の輪

私とユウスケは、それから度々、二組で話すようになった。恵はというと、いつも翔のところへ。

「翔に俺たちの関係……教えてもいいだろ？」

「うん。恵にも教えていいでしょ？」

「もちろん。てか俺は、付き合うたびにバスケ部連中に教えまくってるし。」

「ユウスケの噂が絶えないわけだ……。」

告白した日、二人でそんなことを話した。

付き合い初めてまだ三日、翔と恵は私達の関係を知っている。

「あの二人、いい感じだね。」

翔と恵を見ながら、ユウスケに耳打ちする。

「だな。時間の問題って感じだな！」

からかうように笑って、手でハートマークをつくるユウスケ。

そして、目を丸くして

「あっ」

と呟く。

「どしたのユウスケ？」

机から身を乗り出す。

「思いだした。確か、たっちを俺に紹介してくれるんだよねー？ひより。」

……すっかり忘れてた。もう、誤魔化すことも出来なさそう。しばらく天井を見つめて、考え事をしているフリをした。

「あー、うん。」

結局何も思いつかなかった。

「じゃあ、昼休みに。よろしくっ!」

ユウスケは軽く答える。私も笑顔で頷いてみせるが、内心焦る。

「ついでに河原? っていうヤツもね。」

「ふえっ?」

まったく。

自分で言ったことだもん、仕方ないかあ。

「ひよこ? お、俺に用なのか?」

河原は廊下で突然私に話し掛けられて、びっくりしていた。

「実は、頼みがあつて……ごめんね河原。」

一通り事情を説明すると、河原は納得いかない表情をした。

「いいけど、なんで堀内佑介に俺を紹介するんだ?」

「男友達が欲しいらしくて。」

「……ゲイ?」

「違う。私、彼女だし。」

思わず口が滑ってしまい、私は慌てて手で口を覆う。

「私……勇気を出したの。頑張つて告った。」

「翔にはなく。堀内佑介に。」

「う、うん。」

まあどつちでもいいけど、と河原は苦笑した。

「今でも私のこと、引きずってる?」

「いや全然。」

即答。

「新しく好きな人が出来たし……その人にも好きな人いるから、到底叶いそうにないんだけどさ。」

河原が困った顔しながら、溜め息をつく。……いろんな表情があつて、おもしろいなあ。

「何、私に散々あれこれ言っておいて、諦める気？ 河原のくせして。」

「河原のくせにつて何だよ。」

二人で笑っていると、ドタドタと走る音が聞こえた。見てみれば、恵だ。

「も〜、ひよりい〜！ 男子と話してはっかりなんだから！」

恵が私の腕を、ぎゅっと掴む。私は口を尖らせる。

「恵だつて翔と……」

「え？ 何？」

わざとらしい。

河原が戸惑つてる。

「河原っ。昼休みに、ユウスケとセットで来るから！」

「はい、はい。もう行きますよ〜、ひよりさん。おいしい給食が待ってますよ〜。」

恵が私の腕を引っ張る。私はそれに抵抗する。

「まだ、たつちに伝えてない！」

「たつち？ 鈴木達也？ ……あいつも？」

私は河原の言葉に、強く頷く。

「だったら伝えといてやるよ、ひよりの言葉を、達也に。」

自信気にそう言うが、たつちと河原は、別に特別仲良しでもなかったハズ。

「大丈夫！ 友達の輪で何とかなる！」

私の気持ちを察したように、河原がそう言った。

確かに河原、友達一杯いそう。

私と恵は教室へ戻った。

二十七章：喧嘩腰

昼休み。私とユウスケは肩を並べ、廊下を歩いていた。

河原と会い、私達は立ち止まる。会って早々、ユウスケと河原は喋りまくり。

「なるほど、確かに見た目から馬鹿っぽいな。」

「おい、どういう意味だよ。ユウスケ！」

二人は早速、意気揚々とメアドを交換すると、『またな』なんて挨拶をかわしあっていた。

「……もう別れるの？ ユウスケ。」

「だってもう一人、いるだろ。」

ユウスケが三組へと歩いていく。

もう一人…… たっちのことだ。

小走りでユウスケについていき、三組の扉に寄りかかって立っている たっちの元へと向かった。

たっちは、腕を組んでいる。表情もなんかムスツとしてるし、河原とは対称的だった。

「よお…… えつと、鈴木達也さん？」

ユウスケが少し遠慮がちに話しかけた。

「よう。…… 友達になりたい、なんて突然言う人、誰かと思ったら。」

たっちは表情を変えず、右手をユウスケに伸ばした。ユウスケはためらいがちに自分の右手を出し、たっちと握手する。

何だか形式だけのご挨拶みたい。

そして、たっちはユウスケの手をそのまま放さず、ユウスケのこ
とをじっと見つめて、こう言った。

「いつも女子と絡んでる、お前か。」

たっちはユウスケの手を乱暴に振り払うと、次に私を睨んだ。
…冷たい視線に、思わず戸惑ってしまふ。

「どうなってるんだよ？ 俺に何が言いたいんだ？」

たっちが勝手に喋り出す。……言ってる意味がわからない。

たっちの真剣な表情は変わらず、ただ私は言葉を失うばかり。

「河原から聞いたけど。なんで俺を選んだよ、こいつの友達に。」

「なんでって、それは」

私が言い返そうとすると、ユウスケが見かねたように、閉じてい
た口を開く。

「もう、やめろ！」

私とたっちは、同時にユウスケを見た。

二人とも黙る。

「な、なんでそんなに怒ってんだよ？ 意味わかんねーし！ ……」

俺が悪いなら謝るけど、ただ、ひよりは悪くないから。」

ユウスケは静かに、私の隣に寄り添った。

私たちだけでなく、周りも静かになっている。

昼休みは、ほとんどの人が体育館に行っているからかもしれない。

「お前ら、祭りのときも一緒に……どういう関係？」

たっちが話を切り出す。ユウスケはゆっくりとたっちの正面まで歩き、そして目の前で言った。

「俺たち、付き合ってるよ。」

ユウスケ……何もそんな、堂々と言わなくなつて。なんか、喧嘩腰だし。

「ユウ……」

パシイーン！

その時だった。

たっちが、ユウスケの頬を、殴った。

てのひらで、大きな音がなるくらい。

「た、たっち!？」

ユウスケに走り寄った。……左手で頬をおさえ、呆然としている。時間がたつと共に、握る右手が、震えてきた。

「何殴つてんだよ? ……おまえ!」

私はユウスケの右手を握った。今は、我慢して欲しいから。

たっちは黙っていた。挙げた右手をゆっくりと下ろし、じっとユウスケを見つめたまま、険しい顔で立っていた。

私達は睨みあったまま、動こうとしなかった。

「何やってんだよ鈴木!」

たっちの後ろ、教室の中で、怒鳴り声が聞こえた。……たっちの頭を、誰かが叩く。

「いって!」

たっちが振り向くと、そこには女の子がいた。さっきの怒鳴り声には、先生くらいの威厳があったのに……。

「……藍。」

ユウスケが、ポツリと呟いた。

藍と呼ばれたその子は、ショートカットの、元気そうなお女の子だった。ちょっとつり目なのに、目は大きい。

「く、久米田。お前には関係ないことだよ……！」

たっちが苛立ち気味に言い返すと、藍ちゃんがさすがにこう言った。

「関係無くないよ。だってユウスケは、うちの大切な……」

そこで言葉が途切れ、一瞬の間があった。

「友達、だから。」

二十八章：強気

藍ちゃんは、たつちのことを鋭い目で見据える。

「いいから、揉め事はやめときな。じゃないと先生が……いや、その前に私の手が、とぶよ。」

藍ちゃんがフツと笑い、構えてみせる。ユウスケはそれを見て、たつちに言った。

「言うこと聞いておいたほうがいいぜ。こいつ、空手習ってるから。」

現在進行形。

確かに、構えからして強そうだもんな……。

「ほら、二人に謝んな。」

藍ちゃんが、顎で私達を差す。

……だけどたつちは、嫌な顔をするだけ。

「……何黙ってるの？ さっさと謝れよ。」

藍ちゃんがいくらキツク言っても、たつちは口を開こうとしない。ふと溜め息がもれる。

「はあ。鈴木って、意地っぱりだなあ。」

藍ちゃんは呆れたように手をヒラヒラさせ、困ったようにユウスケを見た。

ユウスケも首を振る。

「……たつち、私がさっき言いかけたこと、教えてあげる。」

皆困った様子だったから、私が沈黙を破ってみせた。たっちがこっちを見る。

「たっちをユウスケに紹介した理由は、たっちが、馬鹿だからだよ！」

「は？」

「意地っ張りだしさあ……ずるいしさあ……」

「いつの話だよ。」

いつって……ずっと昔のこと。

ラジオ体操で、たっちつてば、深呼吸のときに来てたよね。

「とにかく、私が今まで見てきた人の中で、たっちが一番馬鹿だったの！ バカバカバカ！ バーカ！」

たっちは黙って、私の声を聞いていた。

眉間にシワよせて。多分、怒ってる。

「人のこと、すぐ殴ったり……馬鹿すぎるから！」

「……うっせえ！ ひよこのほうが馬鹿だかな、バーカ！」

「なんで私が馬鹿になんの、意味わかんないから！ 馬鹿じゃないし！」

どんどん声が大きくなって、体も熱くなってくる。二人で延々と言い合いをしていると、手を叩く音が、二回した。

「はいはい。夫婦喧嘩は、それぐらいにしな。」

その瞬間、私達は同時に藍ちゃんのほうに振り替える。

「誰が夫婦!？」

声が綺麗にハモった。ユウスケが怪訝そうな顔をする。
私達はまた顔を見合わせ、そしてすぐそらした。……「ごめんです、この人の妻なんて。」

「俺が悪かったよ。」

「ふえ」

……びっくりした。ユウスケが、突然私の手首を掴み、強い力で引つ張ったからだ。

「だから、もういい。迷惑かけたな……じゃあな。」

吐き捨てるように、暗い声で言った。ユウスケの言葉に、誰も答えようとはしなかった。

廊下の角を適当に曲がりながら進み、二人が見えなくなってしまう。それでも、私はずっと手首を掴まれていた。

「ユウスケ、放してくれない？ 痛いよ。」

少し強めに言うと、ユウスケは突然私の手首をはなした。

あまりにも突然すぎて、少しよろけた。

「ごめん……私、なんか悪いこと、しちゃった？」

ユウスケの顔を横から覗きこもつとすると、その前にこつちを振り返った。

「ずいぶん仲良いんだな、と思って。」

真顔で、落ち着いた声で言われた。

「たっちと？」

ユウスケはコクリと頷く。私は逆に、思いきり首をふってみせた。

「そんなわけないよ、さっきの見たでしょ……?」

「喧嘩する程、仲が良い。だろ?」

ユウスケの表情は変わらない。……少し寒気がした。

「ま、まさか」

「……なーんてな。」

ユウスケが苦笑した。私は呆然とするばかり。

「冗談に決まってるだろ?」

少し表情が悲しく見えるのは、私の目が悪いから?

「じゃあなんで……」

「だから、冗談だって。」

じゃあなんで、無理矢理私をここまで連れてきたの?

私はひとりで歩き出す。ユウスケが、後からついてくる。

「どこ行くんだよ。」

迷わずこう答えた。

「三組。」

二十九章：藍

三組へと戻ると、入り口には待つてましたとばかりに、藍ちゃんが立っていた。たっちの姿は、もうない。

「おかえり、ずいぶんと早いご帰宅だ。」

藍ちゃんの言い回しに、老けた印象を覚える。

「どこにいったんだよ？」

「そういうわりに、探してくれなかったじゃんっ。」

不思議と、今日会ったばかりなのに、会話が進む。藍ちゃんはふっと笑ってみせると、左手をおもむろに日の光にかざしてみせた。

左手の指全てに、指輪がはまっている。薬指に金の指輪、薬指以外には銀の指輪。

「見る、友情の証だ。もらっとけ。」

そういつて、人指し指にはまっていた銀の指輪を外し、私に渡す。とりあえず、左手の人指し指につけてみると、ぴったりだ。

「おう、似合う似合う。」

藍ちゃんが私の指を見て誉める。

「いいの？ もらっちゃって。」

「さっき言っただろ？ うちがダチだと思った奴には、その指輪を……証をやるんだ。」

ずいぶんと臭いセリフだが、藍ちゃんが言うすとすんなり受け入れられる。

「そうなんだ、では遠慮なく……。あ、さっきから思ってたんだけど、その金の指輪はなんなの？ 親友の証？」

軽く訪ねてみると、急に藍ちゃんが黙った。金の指輪を右手で隠すように握りながら、伏し目で小さく言う。

「これは、違う。誰にもあげられないよ。うちの物さ。」

「……ああ、そうなんだ。」

暗い雰囲気になってしまったので、適当に返事をし、それ以上追

求しないことにした。

「そつだ、自己紹介をさせてくれ。」

藍ちゃんが思い出したように口を開き、突然明るくなる。

右手を腰にあて、威勢がいい自己紹介が始まった。

「久米田藍、三組。一応、空手を小学校入学前からならってる。好きな色は、ブラック・シルバー。」

毎年同じことを言っているかのように、スラスラと試みてみせた。私も自己紹介をする。

「菅野ひより、四組。帰宅部です。よろしく……。」

少し照れ笑いを浮かべてみせると、藍ちゃんが声を上げて笑った。「よしよし、よろしくな。……あ、てめえは別にいいよ。自己紹介しないで。」

ユウスケは藍ちゃんと目を合わせ、『それくらいわかってる』と無愛想に言った。

「……そういえば、二人は小学校からの付き合い、何だっけ？」
気兼ねなく訪ねてみる。

「まあな。でも、まさか再び話すことがあるとは……。」

「え？ 何かあったの？」

藍ちゃんはその場にヤンキー座りをして、もったいぶってゆっくりと、『いや、別に？』と言った。

「ただ、クラスもかわつちまつて、きつとユウスケとはもう喋んねえだろうと思ってただけだよ。」

ユウスケも藍ちゃんの言葉に、相槌をした。

そのとき、チャイムが鳴った。妙に長かった昼休みが、終わったのだ。

私は四組。ここからだ、少し走らなきゃ。

「あーっ、授業始まつちゃう！ またね！」

私はその場から、逃げるように去った。

ひよりがいなくなった後、二人はやつと動き始めた。藍はよいしよと立ち上がる。

佑介は二組に入ろうと、黙って歩き始める。

「鈴木のこと、気にすんなよ。」

いつもと同じように、明るく藍が言った。佑介は一度立ち止まり、重々しい口を開いた。

「気にしてなんかないさ。むしろ、お前のほうが気になる。」

佑介はいつになく暗い。藍は多少の戸惑いを感じながらも、鼻で笑ってみせた。

佑介は構わず話を続ける。

「藍だつて気になっているんだろ？ 俺は、そういう態度が気に入らないんだ。」

藍は黙って話を聞いている。

「俺のことが嫌いじゃなかったなら、どうして俺を……！」

「別に理由なんて、今となつてはいつでもいいことじゃないか、親友。」

藍は嫌味を込めて、『親友』と強く言った。佑介は感情が押さえきれなくなる。

「なら、なんで金の指輪をつけてるんだ？ 俺を親友に格下げしてからもずっと！」

「……わかつたよ捨ててやる！」

金属音がした。床の上を光る輪が一度跳ね、そして転がり、立ち止まる佑介の足元までくる。

振り返り、足元のそれを彼は拾う。

「返却されるほうがもっとムカツクぜ、意地っ張り。」

「てめえのほうが悪だっ！」

三組の扉が、勢い良くしまった。

三十三章：反応

藍ちゃんと知り合った日がまるで昨日のこのよう。だけど、気が付けばもう十二月。

スカートから出る生足に、冷たい風が刺さるようにあたる。

「もうすぐクリスマスだねっ！」

「ああ。」

「ユウスケ、何が欲しい？」

「ええつと〜……」

学校から帰る前の、何気無いユウスケとの会話。こんな、付き合った頃からずっと続いていることだ。

元から小学校が違うだけあって、家の方向もほぼ真逆。話す時間といえば、帰る前の少しの間しかない。……その時間が、私にとってもっとも幸せなとき、なんだけど。

最近、何かが変わる。何か引つ掛かる。ユウスケと、話していると、たつちに殴られた次の日あたりまで元気がなかったものの、それからはすっかりいつもの調子を戻して、笑いあたりふざけあったりしてくれたのに。

今だってそれは同じ。

だけど、二週間あたり前から、ユウスケの様子がおかしいと感じ始めた。

なんとなく、だけど。

「やあ、お二人さん。」

後ろから不意に、声がした。軽い感じで、でも話し方はどこか大

人っばい……藍ちゃんしかいない。

「藍ちゃん、おはよ〜。」

「って遅いだろ!」

藍ちゃんがつつこみをした途端、三人でどっと笑う。

「あ〜、ボケ最高だよ、ひよこ……」

「ひよこ!？」

突然呼ばれた、その名前。たちちに付けられた、藍ちゃんを知るはずのない名前。

「どうして……知ってるの？」

笑いながら聞く。藍ちゃんはどういうことかと驚いたようで、

「ちよつと噛んだだけだぞ?」

とおそろおそろ言う。

ユウスケだけが私の反応の意味がわかっていて、無表情でいる。

「何? え? 悪いこといっちゃまったか?」

「いや、たつちが」

「鈴木か。」

言い掛けたところを、話を強制終了させるように言葉で返された。

「ひよこって呼んでたの。あだ名。」

「なるほど〜。」

納得されてしまった……。絶対変な意味で理解された。だって藍ちゃん、遠い目だもん。

私たちはその後うまく会話を繋げることができず、解散した。

そしていよいよ運命の日。クリスマスイブだった。

事件は、起こった。

三十一章：崩壊

終業式が終わり、クラスの皆と解散した後。私は、学校の玄関に向かつて、走っていた。……手に、赤い袋を抱えて。

ユウスケへのクリスマスプレゼント　ユウスケの、しばらく見ていない笑顔を思い浮かべながら買った物。

ずっと前から、渡したくてしようがなかった。浮かれながら、廊下を走ってた。

でも、ドキドキした暖かい気持ちは、一瞬で壊れてしまった。

玄関に行ってもユウスケの姿は無く、靴箱を確認しても、外靴は消えていた。

私は、先に帰ってしまったことにちょっと腹が立ってしまったけど。

このまま渡さない訳にもいかない。

帰るのが遅くなってしまふけど、仕方ない。

私は、ユウスケの家まで届けに行くことにした。

家とは反対方向の道を小走りで進み、ユウスケに途中で会えたらいいな、と思った。

粉雪がパラパラと降ってきた。ゆっくりと地面に落ちては溶ける。白い息を吐きながら、私は走った。

そして止まった。

目の前には二つの影。黒いコートに身を包んだ二人は、笑いながら歩いていった。

このまま帰ろうかと思った　　だけど、気付かれてしまった。
一人が後ろを振り替えて、そして笑った。

「ひより！」

その笑顔は、いつもと何ら変わりなかった。変わっていたのは、
そう、ユウスケだけで。

「あ、藍ちゃん。ユウスケと、帰ってたっけ？」

こんなことは聞きたくなかった。ただユウスケに、なんで勝手に
帰ったのって、聞きたかっただけ。

成り行きで聞いてしまった。

藍ちゃんは、

「ああ」

と笑って、黒いコートから、自分の手をだして……ユウスケの手を
握った。

「うちら、付き合ってるからな。」

ピタ、と私は止まった。知らないうちに体が震えだして、頭の中
が真っ白になって、そして　　気付いたときには怒鳴っていた。

「付き合ってるのは……付き合ってるのは、私たち、だよおお！」

プレゼントを地面に叩き付けて、そして泣いた。

「私とユウスケは……」

そこで言葉を詰まらせてしまった。荒い呼吸を整える。

「どうして!？」

二人を交互に睨みつけた。憎しみが、どんどん沸いてきた。

ユウスケにも、藍ちゃんにも。

ユウスケは、私の告白を、受けてくれたはず。

藍ちゃんは、私たちの関係を、知っていたはず。

私は藍ちゃんからもらった、銀の指輪を外し、捨てた。
藍ちゃんなんか、友達じゃない。酷い。酷すぎる。

指輪とプレゼントと二人を置いて、全力で走った。
一度も振り返らずに。

三十二章：距離

傷ついたら、誰に言えばいいの？ 大切な、人？
大切な人って誰なの？

ユウスケ、ユウスケは。私の大切な、人ではなかったのですか。

泣きながら走った。声を漏らさないように。人に気付かれないように。
うに。

家に向かっているのかさえ、わからない。ただ走った。二人
から逃げるために。

道が柔らかくなった。コンクリートの道からはずれ、私は土を踏みしめていた。

雑草がぼうぼうと生えていたそこは、川のほとりだった。

人が一人、立っている。私と同じ、一人……。

川の近くまで歩いた。昼間見るとよんでいる川に、今は夕日が映り、とつても綺麗。

「お前……。」

川の近くでじっと立っていると、さっきからずっとそこに立っていた人が？

「たっち？」

疑問系にする必要もなかった。確かにその人は、制服姿の、たっち。

四月のときよりも、背が少し伸びているように見える。

「俺だけの場所に……ここは立ち入り禁止だぞ？」

冗談っぽく笑って、たっちは川へ視線を戻した。

「俺だけの場所？ やっぱりずるいね、たっちは。」
私もたっちの冗談に付き合っただけだ。ただ、声はまだ震えていた。

「どうした？」

そこは突っ込まなくていいのに。

でも、心配してくれている。

髪をかきあげて、

「別に」

と強がった。だけど、強がってみせると、逆に辛くなってしまった。涙がまた溢れてきて、拭いても隠しきれなくなった。

「……話してみるよ。」

話せるわけない、と思いながら、口では勝手に話してしまっていた。誰かに、聞いて欲しかったから……。

二人で並んで座り、私は全てを話した。

……話し終わった後、たっちは軽く溜め息をついた。

「堀内のことはよくわからないけど、奴は駄目だな。浮気だろー？」

……浮気。なんか、ドロドロですなー。「あいつは駄目だって、

俺、言っただろ？」

「聞いてないし。」

いや、聞いてたかもしれない。付き合っただけで別れる、彼の性格を。

……何と無く気分が悪くなって、うつ向いた。

「なんか、他人事みたいに言うな。まあ、いいけどさ。俺さ、

あいつのこと、ぱーんって殴っただろ？」

ああ、あのときはユウスケ、私に嫉妬してたかも。

私のこと連れ回したりしたし。

「殴るイコール、メッセージって事？ 滅茶苦茶でしょ。」

「いや、きつと誰に對してでも殴つてた……つてのは冗談で。良い噂は聞いてなかつたな。」

だからって、人を殴つて良いわけないよ。手段を選ばないのは、たつちの悪いところだつて、わかつてるけど。

私は自分の腕にうづくまつた。泣くのを、こらえるために。

「だつて、ユウスケ、格好よかつたんだもん。最高に優しくして、私を笑わせてくれて。私を好きだつて言ってくれた。」

わかつてたんだ。きつと、皆に優しくしてるたんだらうなつて。私だけが特別じゃないんだらうなつて。

それなのに 皆ユウスケの虜になつて、捨てられたんだ。

「……俺には、そういうこと言ってくれなかつたよな。」
ふいにたつちが呟いた。私は、顔をあげた。

たつちはもう、立ち上がつて土をほろつてゐる所だつた。

「当たり前だよ、だつてユウスケとたつちは違うもん。 だけど、寂しいよ。もうユウスケとは、付き合えないよ。」

たつちは私の言葉を聞くと、不自然に声をあげて笑つて、そして私をじつと見つめてこう言つた。

「だから俺に、乗り換えようつてか？」

その顔は、笑顔と寂しさが半々という感じだつた。視線は、酷く冷たさをおびている。

「そんなこと……」

私が言葉を発した瞬間、彼は走つた。訳が解らず、私は「待つて！」

と叫んだ。

私が呆然と立ち尽くしている間、たつちは橋を渡り、あつという

間に向こう岸へとたどり着いていた。

「もう遅いぜ！」

たちが私に向かって叫んだ。遠くから見ると、その影は物凄く小さく見える。

「俺、彼女いるからさ！」

別に、聞いてない。

たちは回れ右をして歩いたまま、振り返らなかった。

三十三章：告白

翌日。

学校を休もうかと思ったけど、私は登校した。

ユウスケと、白黒つけるために。

鞆を教室に置いた後、私は玄関の側で、ユウスケを待ち伏せしていた。

「ひよりちゃん、おはよー。」

久しぶりの御登場、奈央ちゃんだ。手を振りながら、軽く通りすぎようとす。

私は、奈央ちゃんの腕を掴んだ。昨日ね、たっちが意味不明

な行動をしたの……じゃなくて。

「ちよつ、なあに？」

「ユウスケが、あ、藍ちゃんと！」

私が言葉を噛みながら喋ると、奈央ちゃんは私の手を振り払った。後にして、私、玄関で彼をお出迎えしなきゃならないの！ わかる？」

だから毎日こんなに早く登校してるの、と眉を釣り上げながら奈央ちゃんが答える。

相当ストレス溜ってそうだ。

「ああ、いつてらっしやい。」

恋愛の悪魔……いや神も、大変なんだなあ。

ところでまだ、彼氏は生徒会長なのかな？

なんて考えながら立っていると。

気まずそうに、私を見ながら上靴を履く、藍ちゃんを発見。

私も反応に困り、視線を反らす。

「ひより、ひよりっ！」

しばらくすると、藍ちゃんが小走りで私の元へやってくる。すると私の手を握り……。

「殴れっ。いや、殴ってください！」

周りの生徒たちは、一斉に頭にハテナマークを浮かべ、私たちを見る。

「藍ちゃん。まず、話そうよ。ねっ？」

私が優しく……といっても、表情は苦笑、といった感じだった。ただろっけど……言っと、藍ちゃんは握っていた手を素直に放した。

「ひよりがそういうのなら　うちの話を聞いてくれ！」

藍ちゃんは壁際に寄ると、ヒソヒソと小声で語り始めた。

「ひよりが居なくなっただ後、うちは、ユウスケに突き止めた。……

お前、まさかひよりと付き合ってたのか？　ってな。」

私はふと、藍ちゃんと出会ったときの状況を思い出した。

藍ちゃんは、たっちがユウスケを殴ったから、教室から出てきた。

つまり、私・たっち・ユウスケの会話を、聞いてないんだ。

だから……私とユウスケが付き合っていた、ということを知らなかった。

「そうしたら、奴は頷いたんだ。うちは思わずユウスケを蹴り飛ばして……ほら。」

藍ちゃんは、銀の指輪を私に見せた。少し傷付いている。

「これを拾って、逃げた。　ひよりのだ。」

私は、藍ちゃんから銀の指輪を受取り、左手の人指し指にはめた。

……友情の証。

「まだ話は、終わってないぜ。」

藍ちゃんが、口を開き掛けた私に言った。

「実は、な。こちらは……うちとユウスケは……昔、付き合ってた。

「すつと血の気が引いた。藍ちゃんの、ユウスケに対しての反応の意味が、やっとわかった。」

「ユウスケは、きつとまだうちに未練があったんだろうな。ユウスケは、人に振られたことがなかったから。」

寒そうに腕を擦りながら、遠い目をして語る、藍ちゃん。

「それって、どういうこと？」

「ユウスケと付き合った奴は、皆ユウスケに振られて別れる。でも、うちと付き合ったときだけは、違った。うちから、奴を振ったんだ。」

ふと、藍ちゃんが左手を見せる。

薬指には、出会った頃にもはまっていた、金の指輪。

「これ、あいつからもらった。……おかしーよな、外せないなんて。」

皆、ユウスケの虜になっては突き放される。ただ、藍ちゃんだけは。虜になったのに、自分から突き放した。

「好きならどうして、ユウスケをふつたの？」

藍ちゃんが、ユウスケと付き合っていたら。

私は、ユウスケの彼女にならなくても、良かったのに。

藍ちゃんは申し訳なさそうに、目を伏せた。

穴があつたら入りたい、みたいな感じかな。

「さあな。……ただ、うちは、臆病だから。」

顔を上げて、私の目を見て、ゆっくりとこう言った。

「奴に突き放されるぐらいならつてな。……馬鹿か。」

苦笑して、壁にもたれて、しばらく藍ちゃんは動かなかった。

私はかけてあげる言葉も、思い付かなかった。私が被害者のはずなのに、藍ちゃんに怒鳴った自分が、恥ずかしくなってきた。

「ごめんな、ひより。」

「……何？」

藍ちゃんが拳をぎゅっと握り締め、震えながら喋った。

「うち、ユウスケのこと、嫌いになれねーや……。」

言い終わった後、肩の力を一気に抜いて、藍ちゃんは溜め息をついた。

「嫌いになれない、じゃなくて、好きなんですよ。」

私は別にいいよ、というふうに、少しだけ笑った。

「おっはよお！」

遠くでざわめきと、幸せそうな奈央ちゃんの声が聞こえる。

私たちは、こんなに暗くて、不幸せだというのに。

今日は終業式、浮かれるのも当然か。

「待って、待ってってば！ ねえ。」

奈央ちゃんは、早歩きするたっちの後を、声をあげながら追っかけている。

たっちは左腕を奈央ちゃんに取られ、少し面倒くさそうな顔をした。

「逃げちゃ駄目だよ！」

幸せそうに奈央ちゃんは笑って、目の前をたっちと共に去っていった。

「……奈央。」

藍ちゃんは軽く奈央ちゃんを睨みつけ、またうつ向いた。

三十四章：ねぼすけ

藍ちゃんは、ユウスケとは今話したくない、と教室へ行ってしまった。

私もユウスケと二人きりで話したくはなかったので、四組へ戻る。

「おはよ、恵。」

取り合えず親友に挨拶し、席につく。今は誰とも話したくない。

「もう、どこに行ってたのお？ ひより。」

おっとりした喋り方で、軽く私の顔を除きこむ、恵。

「その辺。」

最大限に言葉を短くして、恵に返事を返した。

恵は困ったように溜め息をついて、肩を軽く叩いた。

「まあ、頑張りなよ。」

人の悩みには関与しない恵は、冷たいとも言えるけど、今はそのほうが良かった。

……だけど、十分頑張ってるんだよ、ね。

始業式。校長先生の話聞きながら、ぼーっとしていた。

「最近では雪もちらほらと……」

耳に入っては、逆の耳から抜けていく。

たっちの彼女って、奈央ちゃんだったんだ。

お祭りのとき、そんなじゃない、なんて言い訳してたのに。

そう言えば奈央ちゃん、好きな人がいるって、前から

「菅野！」

先生に叩かれる。

私以外、四組の皆は、全員立っていて……

「退場？」

「わかったら、さっさと立ちなさい。寝坊助！」

体育館から、どっと笑い声が……。恥ずかしい！

誰がねほすけだよお！

私はすつと立ち上がって、顔を伏せながら、体育館を出た。

「退場のとき、寝てたんだって？ ねほすけ。」

藍ちゃんが笑いながら、声をかけてくる。

……今日で何回目だろう。

風の噂で、四組より早く退場した一組・二組・三組も、私が退場のとき寝ていたことを知っているのだ。

「ちょっと疲れてたの！ もういいじゃん。今日は散々だあ……。」

わざとらしく肩を落とすと、藍ちゃんは私の頭をポンポン叩く。

「元気だせ。これからユウスケ狩りに、出発だ！」

「……そういえば藍ちゃん、ヤケに元気ハツラツになったね。」

藍ちゃんはフフン、と鼻で笑って、二組へ視線を移してから言った。

「ねほすけのお陰だよ。」

……格好良い冗談。

三十五章：怒鳴り合い

藍ちゃんは、ここ……廊下に広がるホールから、じっと二組を見据えている。

まるでこれから、熊でも狩りに行くかのよう。

「ユウスケ、いた？」

「もし見つけたら、すぐに二組に突っ込むに、決まってるだろ。」

そう言った直後、藍ちゃんは目を開き、二組に突っ込んで行った。見つけたらしい。

「ユウスケッ！」

怒鳴り声をあげながら、藍ちゃんはユウスケに素早く近付き、腕を掴んだ。

空手、習ってるんだっけ……。

ユウスケも、『しまった』みたいな顔をして、逃げようとするが、藍ちゃんの腕は離れてはくれない。

「やめっ、やめろ！ 逃げねえからあ！」

「何！？ てめえ、今逃げようとしてただろ！」

廊下にギンギン響く、二人の声。周りのことなんて、考えていないようだ。

一人取り残される私。

「おい、そこ！」

階段から丁度降りてきた先生が、小走りで近寄ってくる。

「何やってるんだ!？」

……その瞬間、藍ちゃんはユウスケの腕を放し。

ユウスケは姿勢を正し。
『何もしてません!』

二人の声は、見事に揃った。

「まったく、なんで何だよ。」

私たちは今、学校を飛び出して、三人で昨日たっちと出会った川のほとりを歩いている。

私たちはそれぞれ気まずい顔をして、無言で歩いていた。

そんなとき、藍ちゃんがふいに呟いたのだ。

「なんで、あんな。まるで漫才だ。」

藍ちゃんは石ころを蹴り飛ばし、川に落とした。

こんな風に言っておきながら、実は藍ちゃんは、ユウスケのことが好きなんだから 信じられない。

「もっと嬉しそうに言えよな。夫婦漫才だぜ?」

ユウスケの言葉に、私たち二人が同時に反応する。

「俺が告ったとき、お前、めちゃくちゃ嬉しそうに笑ってくれただろ。」

藍ちゃんがユウスケを、刺すように睨みつける。

私はユウスケの今の言葉で、心をえぐりとられたみたいになった。ようは、ものすごく悲しくて、苦しい。

今までは、ユウスケの言葉で、暖かい気持ちになれたのに。

「お前、何だよその言い方。ひよりに対して失礼だ!」

「だって、実際にそうだろ。」

もついいい。

もう、どうでもいい。

心の中でそう思っているのに。もうユウスケと関わる気持ちは無いのに。

何より、藍ちゃんはユウスケが好きなのに。

藍ちゃんは、一生懸命、私をかばう。

「だからって！ ひよりはどうでも良いのか!？」

「俺はずっと、藍が好きだったんだ!」

「何だよそれ!」

「良いから聞け!」

二人は立ち止まって、互いに怒鳴りあっていた。

私はそれを近くから、でも遠くから、見つめていた。

「藍、俺は、お前に振られたとき、すごくショックだった。今まで全部自分から振ってたから、こんなにショックだったことはなかったんだ。」

もはや二人だけの世界だった。

ユウスケがゆっくりと話す、その内容を、藍ちゃんは一言も聞き漏らさないくらい集中して聞いていた。

だけど瞳からは、失望の色が隠せていない。

「だから俺は、いろんな奴と付き合った。藍の代わりになる奴を、探すために。寂しさをまぎらわすために。」

言葉を区切りながら、ユウスケは思い出を噛み締めるように呟いた。

「そうして、俺は藍と、完全に関係を切ったつもりだった。」

藍ちゃんは表情を隠すようにうつむくユウスケを、じっと見つめてから言った。

「うちが、友達だなんて、中途半端なこと言ったからか？」

ユウスケはこくと頷いて、それきり黙った。

藍ちゃんは溜め息をつきながら髪をかきあげ、足の裏で石をいじった。

「そうさ……うちには気があった。お前に。　　うちは、ユウスケに捨てられるのが、嫌だったんだ。だから、振った。」

藍ちゃんは一度私を見て、すぐに視線をユウスケに変えた。

「ユウスケ、うちが指輪を……お前からもらった金の指輪を捨てた後、お前はわざわざうちに届けに来たよな。　　まだ気があるんだなあって、再確認できたよ。」

藍ちゃんは一通り喋り尽した後、今度は川を見た。

川は水の流れる音を、優しく私たちに聞かせてくれていた。

「中途半端なんだよ。」

ユウスケが口を開いた。川を見ていた私たち二人は、ユウスケに視線を移す。

「なんで俺を振ったんだ！　自分が傷を負わないため……そんな理由で！」

「　　確かにうちも悪かった。だけど、なんでひよりのとの関係を切らずに、うちに近寄ったんだ？」

ユウスケはピタリ、と動くのを止めた。

藍ちゃんに睨まれて　　まるで、石になってしまったかのように。

私は堪えきれず、一度口を開きかけて　　そしてもう一度、きちんと口を開いて。大声で、怒鳴った。

「もう、やめて！」

二人が同時に私を見た。

乾いた空気に、白い息が立ち上る。
私は目につつすら溜った涙を落とさないように、空を見上げた。

三十六章：素直

沈黙だけが、その場に広がった。

水の流れる音が、優しく心地好く、耳に入っていく。

二人とも、私の言葉をじっと待っていた。

手を握りしめ、小刻に震えながら、私は何を話そうが一生懸命考えた。

でも……結局、うまく言葉になるまでまとまらず、私は自分の思ったことを素直に口に出そうと決心した。

「もういいの……ユウスケが言ってくれたことも、私に対して優しくしてくれたことも、全部嘘じゃないって、私は信じてるから。」
小さく、細々とそう言った。

藍ちゃんは、ただ黙ってうつむいて、ゆっくりと目を閉じた。

ユウスケは

「ああ、嘘じゃねーよ、ひより。ひよりのことは、本気で好きになつてたから。初めて藍以外に……一瞬だけだけ。」

ユウスケはそう言うと、その場に崩れるように座り、顔を伏せて泣いた。

私に言っているのか、自分にいいきかせているのか、よくわからない言葉をブツブツ呟いている。

「ユウスケ、私も好きだったよ……一瞬だけ……っ。」
最後のほうは声を出すのが辛く、震えた。

フラフラ揺れながら、私は歩いた。

誰かに支えて欲しかった。例え、物でもいい。何かにしがみつきたい……。

軽く肩が、藍ちゃんにぶつかった。藍ちゃんは、フラフラの私の肩を、しっかりと両手で掴み、支えた。

ただ私は立とうとせず、藍ちゃんの腕を掴んで、必死に自分に引き寄せた。

藍ちゃんは私の行動に戸惑いながらも、私の頭を自分の胸にあて、腕を背中にまわし、私を抱き締めた。

「……ひよりっ！」

こんなに近くにいるのに。

まるで私が遠くにいるかのように、藍ちゃんは私の名前を大きく叫んだ。

私は藍ちゃんの腕の中で泣いた。

三人は、ずっとずっと泣き続けていた。皆、声を押し殺している。時々、少し鼻水をすすする音が聞こえるだけ。

私はなんだか、ここに居たくなってきた。

藍ちゃんとユウスケは両想い。もしかしたら、邪魔かもしれない。

藍ちゃんの腕から勢い良く離れた。

「おい、ひより？」

びっくりしている藍ちゃんに、私は軽く手を振った。　本当は、

後ろで泣いているユウスケにも。

「バイバイ。」

一言そう言って、私は思いきり走り、その場を後にした。

すっかり夕方だった。

今日は午前中しか学校がなかったので、昼を食べてない。お腹がぐうぐうなっていた。

私は何故か笑ってしまい

そして、家へと急いだ。

三十七章：ひとり

冬休み。

クリスマスやお正月という行事が重なっていたためか、わりと早く、そしてあっさりと終わってしまった。

そんなわけで、いよいよ今日は始業式。今朝は張り切りすぎて、早く起きてしまった。

さすがに何日も休みが続くと、暇で暇でどうしようも無くなる。

「行ってきまーす！」

そうして、勢いよく家の玄関を飛び出した。あれ、朝御飯食べたっけ？

いつもの道を小走りで進む。雪が靴の下でサクサクと軽い音を立てる。

コンビニの前を通りすぎた所で、別れ道。いつもは右に進むけど、今日は気分ですりに進んだ。

何と無く浮かれ気味に歩いていると、前方にふたつ、人影発見！

「恵ちゃん！」

わざと『ちゃん』付けで、恵の名前を呼ぶ。

恵が振り向くと同時に、私は恵の元へと駆け出す。恵の肩を

がっしりと掴み、息を切らしながらも、笑ってみせた。

「よう、ひより。」

恵を呼んだはずなのに、何故か隣の翔から返事が返ってきた。

この二人は、冬休みの中頃から、付き合っている。まあ、学校での二人の仲良しこよしな雰囲気から、こうなることは予測がついていたけど……。

「やくあ、翔君。テスト勉強？」

翔が手に持つ英単語張を指差すと、翔は笑って頷いた。

昔は話しかけることすら出来なかったのに、今はこうして笑いあえるんだから、不思議だ。

「今日は二学期の確認テストがあるからな。ちゃんと復習しておかないと。」

「……家で死ぬほど勉強してるくせにさー、さすが秀才だねえ。」
少し嫌味を言ってみせると、会話に恵が割って入ってきた。

「ちよつとおく、私のことは置いてけぼりですか？」

「ごめんごめん、と私は恵の頭を軽く撫でる。」

恵は黒いコートに、丸みのあるブーツを履いていて、何とも可愛らしかった。

「嫉妬しちゃだめよ、恵ちゃん。」

「してないしつ。ちゃん付けやめろーっ！」

顔を真っ赤にして、恵は私の頭をポカポカ叩く。怒っているというよりも、照れているようだ。

翔も笑いながらこっちを見ている。

「それより、ユウスケ君とはどうなの？」

恵の頬が、一瞬で真っ白になった。私も少し固まり、そして何でもないようにこう言った。

「もう別れた！」

笑顔でそう言うと、二人からはそれぞれ、不思議な声が飛び出した。恵は目を丸くして、頭の上にハテナマークを浮かべる。

「ちよつと、ど、どういうこと？」

続けて翔も。

「……聞いてねえ。」

問いつめてくる二人に無言で笑顔を振り撒き、そして隙をみて、全速力で走った。

「じゃあ学校で！」

振り返り、二人に向かって手を振った。

「ちょっと、どこいくの〜?!」

恵の言葉は無視。

息を切らしながら、とにかく走る。

最近、走って逃げるパターン多いなあ……。

そんなわけで、学校には早くつく。といっても、殆どどの生徒はもう学校にいた。

玄関で洗い立ての白い靴をはき、廊下に出る。すぐに階段をかけるのぼった……足が痛い。

足が相当、ナマってしまったみたい……。

やっとの思いで三階に辿りつき、心の中で安心という意味の溜め息をついた。

懐かしい学校の風景を目に焼き付けながら、まっすぐ四組へは行かず、二組へと向かう。

冬休みが始まる前の、あの事件。何て名付けようか。ユウス

ケ二股事件、かな。

私はユウスケと別れてから、ただひたすら、ある思いだけ抱いていた。それは、『また三人で仲良くできますように』。

ユウスケも、藍ちゃんも、本当に優しい。ユウスケだって、二股したのは確かに悪いことだけど、私のことをふったら、私が傷付くかもって、思ってくれたのかもしれない。

お人好しかもしれないけど、それが私の答え。

私は二組の扉にそっと手をかけて、教室の中を覗いてみる。

窓側の机の上に、あの人。ユウスケが座っている。そのわきに、腕を組んで立っているのは、藍ちゃん。

二人で仲良く笑いあっている。会話の内容まではよくわかんない、けど 笑ってる。

二人はきつと、再出発したんだ。また付き合いだしたんだ。少なくとも、私の目にはそう見える……。

ユウスケ……。

二人に話しかけず、私は二組を去った。その後、妙に寂しくなり、私はユウスケの名を一人で呼んだ。

……四組の教室の前まで来た。だけど入る気にはなれなくて、教室の外の壁にもたれかかった。

複雑な気持ち。

周りの友達は、皆幸せそうに笑うの。……別に、彼氏が居なくたって、素敵な学校生活はおくれるよ？

だけど、私だけ取り残されてるみたい。私の周りの友達は、皆カップルで……私だけひとり。

私が居たら、邪魔なんじゃないのかな。今日の朝、翔に私が話し掛けたときも、恵はまんざらでもないような顔をしていた。

翔とは、唯の友達なのに。

ユウスケ……もう好きじゃないよ、あいつのことなんか……多分。

ううん、もう終わったんだから、ユウスケとは。

ユウスケと、藍ちゃん。二人は幸せそう。

嫉妬しちゃいけないって、分かっているのに。分かっているよね。分からない。

三十八章：黒い陰

私がそうしてずっと壁に持たれかかっている、遠くから小さな恵の影が近付いてくるのがわかった。

今、恵と二人きりになったら、きっとユウスケのことを聞かれる。

私は逃げるように、四組の側から姿を消した。行く当てもないから、やっぱり藍ちゃんとうすけに話しかけてみよう……と、あまり乗り気もなく思った。

「ひよこー！」

二組に向かって歩いてみると、後ろから声をかけられる。

私は反射的に振り返り、彼の名を呼んだ。

「たち……。」

あまり楽しくなさそうな、例えば溜め息に似た声に、たちは特に反応もしなかった。

「今、時間ある？」

たちが学校で、こうして私を呼ぶなんて、思えば珍しいことだった。

私も特にあの二人に会いたいというわけでもなかったから、抵抗無く頷いた。

たちは少し笑うと、親指で自分の後ろを指し、そして無言で歩き始めた。多分、ついてこいと言っても言っているのだろう。

私は黙ってたちについていった。

たちは人気の無い、南階段の踊り場で立ち止まった。

南階段は場所が悪く、あまり生徒が使うことの無い階段だった。

「こんな所で、何？」

立ち止まってからもなかなか話を切り出さないうちに向かって、私は一言切り出した。

「あ、あ。実は、どうしても聞いて欲しい話があって……お前だけに。」

……私だけ？ 奈央ちゃんは？

疑問を口に出す前に、たっちは口を開いた。

「実は」

「ちょっと待った！」

思わず肩が震えてしまう程の、声の大きさ。唯でさえ、廊下は音が響くのに。

「奈央？」

たっちが名前を呼ぶと、上の階から、階段を凄いスピードで降りてくる音が聞こえてきた。

ものの数秒で、手すりのわきから顔がひょっこりと現れる。

「大当たり〜！」

奈央ちゃんは嬉しそうに笑うと、残り五段はある階段を、ピヨンと飛び降り、たっちの隣へと駆け寄った。長いスカートが、ハラリと揺れる。

「こんな静かな所で、ひよりちゃんと二人きりなんて、どうしたの〜？」

奈央ちゃんは強引にたっちの腕を引き寄せると、背が奈央ちゃんより少し高いたっちを上目使いで見た。

「別に、良いだろ。」

たっちは顔をしかめると、奈央ちゃんを腕から引き剥がそうとする。

「良くないっ。」

「……じゃあこっちからも聞かせてもらうけどな、なんで話のいいタイミングでお前が出てきたんだ？ 偶然じゃないだろ。」

奈央ちゃんはふっと笑うと、私をじっと見た。……悪魔の目で。

「偶然よ。まあ強いて言えば、二人の愛の力？　ねえ、たっち。」
奈央ちゃんは私を見つめたまま、じっと動かなかった。まるで、私を石にかえるかのように。

「たっ……ち？」

私は奈央ちゃんに、苦笑いと戸惑いの表情を見せた。『たっち』と呼んでいるのは、この世づ私だけだと思っていたのに……。

「何？　あだ名に著作権でもある訳？」

「無いね……。」

「答えてみなよ。無いんでしょう？」

「無いよ。」

「ほら、すぐ黙っちゃって。たっちって、本当可愛い呼び名じゃない。」

私は黙ったまま、声を出すことが出来なかった。

奈央ちゃんの表情。笑ってるけど、それは昔、私に見せてくれた笑顔じゃなかった。

嫉妬してるんだ、奈央ちゃん。

「ねえ、知ってた？　ひよりちゃん。私達、付き合ってるの。」

奈央ちゃんが話している間、たっちは怒る訳でも笑う訳でもなく、ただ黙っているだけだった。

「……助けて、たっち。」

「ああ、そうなの、おめでとう。」

どうして見てるだけなの？　たっちも奈央ちゃんに協力してるの？　二人で私をはめたの？

「声震えてるよ、ひよりちゃん。」

奈央ちゃんが笑っているように見える。きっと、目の錯覚だけど。

「何が言いたいの？　二人とも！」

耐えきれなくなって、私は叫んだ。

奈央ちゃんは横に首を振ると、あっさりと『別に何も』と返してきた。

「……行こう、たち。」

奈央ちゃんは澄ましてそう言うと、たちと二人で、階段を上っていった。

私、もつとも敵にしたくない人を、敵に回してしまったみたい。

三十九章：親友

チャイムが鳴り響いている。その音を聞いて、ようやくその場から動き出すことが出来た。

奈央ちゃんとの思い出が、パズルのピースのように組み合う。部活見学で初めて会って、次の日には廊下で話して　そのとき、バトミントン部に入るかどうか聞かれて　そのあとは仲良くなって、お祭りに行ったり　それから服装も、私と話した途端、急に変わったし。

……それらのピースを繋げれば、全部たっちの為。私は、たっちと仲良くなるための道具に過ぎなかった。

たっちと仲が良かった私の意見を聞いたりすれば、たっちと仲良くなれるって思ったんだ。

そうして、たっちと付き合うことになって　私は用済み。教室の中に静かに入って、席に着いた。クラスメイトの何人かには気付かれたけど、恵には気付かれなかった。

席に座った後、すぐに扉が開き、先生が中に入ってくる。適当に冬休み中の生活のことや三学期のテストのことなどを話して、廊下に整列。体育館に行き、始業式を終え、ホームルームを終えて。それでも私の頭の中は、『あること』で一杯だった。……それは、奈央ちゃんのこと。

たっちとさえ関わらなければ、私にはもう被害はないだろう、と　なんとか不安をまぎらわしていた。

帰りに、藍ちゃんに会ってみる。藍ちゃんの側に駆け寄ると、藍ちゃんは『おう、久しぶり』となんの抵抗もなく話し掛けてくれた。

「うん、久しぶり。ちよっと話があって……外でいい？」

「ん？　ああ。」

藍ちゃんは戸惑いながらも、頷いてくれた。一緒に学校の外に出ると、簡単に奈央ちゃんのことを話した。

「……随分と低レベルな嫌がらせだな。」

鼻で笑いながらも、藍ちゃんの目付きは鋭かった。

周りの生徒が次々と立ち去って行く中、校門の前で二人、立ち止まっていた。

「心配するなよ、ひより。うちが居ることを忘れんじやない。お前のことを、しばらくは見といてやるさ。」

藍ちゃんは積もった雪を足で踏み潰すと、笑った。

私も笑いかえしたけれど、藍ちゃんの表情は厳しいもの変わった。

「こういうパターンは、よく見掛けるからな……。」

翌日。

昨日はスキップを初めてしまいそうな程嬉しい気分だったのに、今日は気が重くてしよがなかった。学校に行きたくないと思いつつ、休むわけにもいかなかった……もうすぐ、学年末テストもあるし。

学校に到着すると、いつもどおり恵に挨拶。席に着くと同時にチャイムが鳴る。

頬杖について、ぼーっとサイド黒板を見つめた。じっと見ていると、緑なんだか黒なんだか、わからなくなってくる。

「もうすぐ二年生だ。今度のテストで、進級したときに足を引っぱらないようにな。……聞いているのか？ 管野。」

頬杖を崩して、瞬きを数回してから、私は頬を赤らめた。

「いえ、はい。」 何だかよくわからない返事を先生に返すと、皆が失笑。これなら教室中大爆笑、のほうがまだいいのに。

「まったく、言っている側から……まあいい。とにかく」
先生はまた話を続ける。

私は、深く溜め息をついた。 だって、先生が教室に入ってきて

たのがいつだったかさえ、よく覚えていないんだもの。

「ひよりい〜。」

授業の合間の休み時間。恵が笑いながら、こっちに近付いてくる。

「またお馬鹿さん炸裂って感じ？ 氣い抜けすぎだから〜！」

恵は水飲み行こう、と手招きをして、廊下に出た。

「だって、つまないんだもん。」 恵の隣に並ぶと、私だってそうだよ、と恵は歩きながら口を尖らせた。

「ただ、最近のひよりってば、ぼーっとしてるときが八割くらいしめちゃってるしさ〜」

恵は私の顔を見ながら、蛇口を捻った。ものすごく心配そうな顔してる。

恵は体を蛇口に近付けるために前屈みになって、しばらくすると顔を上げ、蛇口を閉めた。

「悩みがあるなら相談してよ？ 頼りないかもしれないけど……」
手で口の水を拭くと、恵は伏し目がちに言った。

頼りない……その言葉に、罪悪感を覚えた。

恵とは親友のはずなのに、相談したことなんて無かった。恵と好きな人が同じだったときだって……結局は打ち明けなかった。

恵。話しても、私のこと嫌いになったり、面倒な奴だって思わないだろうか？ 藍ちゃんとは、少し距離がある。だから、今まで何でも話せたんだ。

いや、違う。本当は私がただ臆病なだけ。

……ごめんね恵。恵のこと、大好きなんだからね。

口ではそんな事、やっぱり言えない。

四十章：突然

「めぐみー。」

恵がはっと目を見開いた。そして振り向いた先には、翔。

恵にとって、大切な存在……私なんかより、きつと、ずっと大切
な。

だって、恵は笑ってる。翔の顔をみただけで、隠しきれない程の
幸せを感じてる。

ここが学校だってこと、忘れてるみたいに。

「あ、あ。翔……」

でも返事はそっけない。女の子って不思議だね。

つい最近まで、私もユウスケに対して、恵みたいに顔を赤くして
いたのかな。……今となってはよくわからないけど。

ただ、なんだか私、すごく冷静。

蛇口の前から水がしたたり落ちていた。……きゅっと指先に力を
こめて、蛇口を閉める。

そんな私のことなどまるっきり無視で、会話を始める恵と翔。

「ねえ、恵。」

恵が会話を一旦中止して、私のほうを見る。

正直、私と翔のどっちが一番大切なの？

ねえ恵、私の前で見せ付けないで。二人は仲良しっていうところ
……お願い。

「もうすぐチャイム鳴っちゃう。もどろっよ。」

そんなこと、言えるはずもなく、私は笑顔で恵を見る。
恵はそうだね、と納得したように頷くと、翔に別れを告げた。
いいようのない罪悪感が、胸のあたりで渦巻いた。

……私は教室に帰ってから、ずっと同じことを考えていた。

私は翔のことが好きなの？ だからあんなこと、考えたの？

……ううん、違う。私が好きなのは、恵。

恵に、ずっと側にいて欲しい。一人にさせないで欲しい。

他の誰とも喋らないで、私だけを見てって、私、思ってるんだ。

みんなそう思わないのかな？ 『○○ちゃんは、私だけのもの』
って。

私は恵に、ずっと側にいて欲しいって思ってる。

汚い人、心が狭い人っていわれても、しょうがないかもしれないね。

本当に私って、欲張りなもの。恵はきっとそれを、知らないんだ。

教室の中で、一人で恵との交換ノートを書いていると、ドアがガラリと開く音がした。

特に気にもせず、座ったまま書くことに集中していると、右肩をポンポンと二回叩かれた。

「はい？」

後ろを振り返ると、違うクラスの女子だった。

つり目で体格は太めで、スカートが一時期の奈央ちゃんくらい短い。
い。

「……放課後、特別室に来てくんない？」

むすっとした顔で、面倒そうに言う。

「え、どうして？」

困惑しつつその子に返事を返すと、その子はまたもや面倒そうに話を始めた。

「あたしじゃなくて、そのお……男子なんだよ。イニシャルだけゆーと、S?」

S……翔?

翔しか浮かばないことが、恥ずかしい。第一、翔には恵がいるじやん。ありえない、ありえない。

「あ、うん、わかった……ありがとう。」

座ったまま、軽く頭を下げてそう言うと、その子は鼻で笑って去っていった。

このくらいで舞い上がるなんて、とでも思ったかな? 澄ました顔してたつもりだったんだけど。

私、全然自分に自信が無いのに。容姿は特に可愛くなんてないし、心はどこまでも汚いし。

人に好意を持たれる程の人間だったんだ……誰なんだろう、Sって。

場合によっては付き合うことも考えちゃうかも。

だって今は、好きな人がいないから。

四十一章：恐怖

廊下はひんやりと、冷たい空気が漂っていた。冬なんだなあ、と
しみじみ感じた。

放課後、特別室、S君。

心の中で何度も、呪文のように繰り返した。

教室の掃除も終わり、ジャンパーも何もはおらず、手ぶらで特別
室へ 行こうと思っていたけど、あまりに廊下が寒くて、コート
をはおる。

それから、特別室からすぐに玄関へ向かえるように、鞆も一応持
っていく。

歩いている間、自分の心臓の鼓動だけが聞こえた。すごくドキド
キしてる。

きつとS君のほうが、私なんかよりも、ずっと緊張していると思
う。

特別室の前につき、鞆を廊下に置いて、ドアの前で深呼吸した。

緊張というより、ワクワクに近いな。これは。

ドアに手をかけ、ゆっくり、ゆっくりと引いた。

隙間から微かに見えるのは……女子の集団だった。

私を呼び出した女子と、その周りに三人くらいの女子。

一瞬ドアを閉めようかと思ったけど、手が勝手にドアを全部引い
た。

しばらく私は硬直していた。女子の集団から睨まれて……もしか
して私、間違えてしまったのかな。

視線を少しずつ上に持って行って、クラスの横のプレートを見る。

そこには確かに、『特別室』の文字。

「やっと来たねえ……待たせやがって。」

リーダー格つぽい、私を呼び出した女子……名札を見るかぎり、佐々野……は、おもいつきり睨みをきかせてそう言った。

すると周りの女子も、口々に私のことを責めた。

「トロいんだよ。」

「ウスノ口。」

「……え？ どういう事？」

頭で分かっているながらも、口ではつい聞いてしまっていた。

「騙されたって事だよ。」

後ろから、突然声がした。振り向けば、目と鼻の先に、奈央ちゃんが入っていた。

ドアを開けたつきり、特別室に入ろうとしない私を中まで追い込むと、にこりと笑った。

「モテない癖に、うかれてんじゃねーよ。」

ついに恐れたことが、起きてしまったようだ。

私はこれからどうなるの？ 殴られる？ 蹴られる？ かつあげとか、されちゃうの……？

「い、いやっ……」

震えながら、必死に奈央ちゃんから逃げた。

私が何をしていたっていうの？ 何もしてない！ ただ、たちちと話ただけで……。

「もう、逃げられないよお？」

奈央ちゃんがニコニコしながら、私に近付いてくる。

他の女

子たちは、黙ってそれを見ていた。

ドアがパタン、と音を立てて閉まった。
奈央ちゃんは私の反応を楽しんでいるかのように、少しずつ私に歩み寄ってきた。

「ひよりちゃん、私がなんで怒ってるか、わ・か・る・ん？」

私は涙目になりつつも、必死に首を横に振った。

「邪魔なんだよ。お前の存在が。……早くいなくなつて？」

こんなに酷いことを言われても、私はただ震えているだけ。

なんでこんな人と友達になったんだろう。向こうはちっとも、私のことを友達だとは思っていないかったのに。

そうだ、ユウスケが……。

「さあつて、どうしようかな？　ねえ、美希。」

「……奈央が決めなよ。」

佐々野が、ふてぶてしくそう答えた。……佐々野ミキつて言うんだ。

私は追い詰められ、壁際にしゃがんでいた。

端にいた女子たちも、私を取り囲むように、側に寄ってきた。

笑っているのは奈央ちゃんだけ。心無しか、他の人は、私に同情しているように見える。　ああ、もう終わりだ。

そのとき、突然ドアが開いた。それも、とても勢い良く。

先生だったらそんな開け方はしない。

女子の囲いのせいで、誰なのかは全然見えない

四十二章：失望

奈央ちゃんのしまった、という顔。鍵をかけるのを忘れていたんだ。

「藍……じゃない。どうしたの？」

「何が“どうしたの？”だ。ひよりに何をして」

藍ちゃんが言い終わる前に、佐々野がパイプ椅子を、藍ちゃんに投げつけた。

がたいの良い佐々野は、見た目通り力が強いらしく、椅子は結構なスピードで飛んでいった。

藍ちゃんは、それをアクション映画のように、ひょいと跳んで避けた。

「……ミキ！」

指示者は、いたって冷静な声をしていた。佐々野を目で制すると、言葉を続けた。

「そんな事しなくていいから、藍もこの部屋に入れてくれる？」

佐々野は面倒臭そうに、渋々了解すると、藍ちゃんに近付いていた。

「そんな事しなくても、うちから入ってやるよ。」

藍ちゃんは部屋に入ると、扉を閉めた。

誰も言葉をはっさない。

すると、藍ちゃんが堂々と女子をかきわけ、私の側まで来た。

「大丈夫か、ひより。立てる？」
私は頷くと、ゆっくり立ち上がった。
周りの女子たちが、皆私を睨みつけている。

「あんまり強引なことはしたくないんだ。少し話でもしようか？」
「……まあ、いいけど。こっちだって強引なことはしたくないし……
…何よりされたくないから。」

奈央ちゃんがフツと苦笑した。それに続いて藍ちゃんも苦笑した。
奈央ちゃんは何も言わずに二・三步下がり、佐々野達に目配りした。
佐々野達はつられるように、数歩後ろへ下がった。

「まず」

数秒沈黙が続いたところで、藍ちゃんが口を開く。

「どうしてひよりを困んだ？」

「消えてほしいから。」

少しの間も無く、即答で返ってきた。多分偽りも何もない、素直な答えなだけに、ショックを受けた。

「別に死ぬまでとは行っていない。学校に来て欲しくないっていうか？」

「……自分のために？」

藍ちゃんは怒りで震え、興奮していた。

逆に私は、悲しい気持ちになつて震えていた。

「えー？ たつちと奈央のために。」

その瞬間、勢い良く手が……私の手が、引つ張られた。

藍ちゃんが私の手を引つ張つて、急に走り始めた。特別室をあっという間に出て行って、廊下を二人で駆け抜けた。

「藍っ！」

後ろでは奈央ちゃんの声……私も藍ちゃんも、振り向くことはしなかった。

奈央ちゃんが近付いてくる気配は無かった。

他の誰でも無く、自分のために オマエハキ工口。

人間って、何て恐ろしいんだろう。今、私の手を握ってくれてい
る藍ちゃんも、いつかは私のことを裏切るかもしれないの？

涙が溢れてきた。なんだか、奈央ちゃんのために泣いてるみたい。
だけど耐えきれなかった。もう何を信じたらいいのか、分からな
くなってしまつて。

手がパツと離された。気付いたらもう玄関だった。

外靴に履き替えながら、藍ちゃんは私にこう言った。

「本気で殴りたかったよ。でもしょうがなく、耐えた。今回はひよ
りもいたしな……。」

そんな優しい言葉に、何も返すことが出来なかった。苦しくて喋
ることが出来ない。

「早く靴履け。あいつらが来るぞ。」

背筋がゾツとなった。

明日から学校、ちゃんと行けるだろうか。

四十三章：姉妹

そのまま、藍ちゃんと一緒に帰る事にした。家の方向は違っけど、藍ちゃんがわざわざ、私に付き添ってくれていた。

私はさっきまでの出来事を思い出してしまつて、言葉を口に出すことが出来なかった。他に生徒が一人もない帰り道は、意外に寂しく静かで、藍ちゃんとの間に、長く沈黙が続いた。

「大丈夫か？」

藍ちゃんが、真っ直ぐ前だけ見て、私にそう聞いてきた。

私はうつ向いて、何も答えなかった。藍ちゃんだつて、とりあえず私に大丈夫かどうかを聞いただけであつて、元から私が大丈夫では無い事くらい、わかつているだろう。

「これからはこうやつて、一緒に登下校してやるうか？ ひより。」

藍ちゃんがやつと黒い目を、私に向けた。

一瞬動揺した。私と藍ちゃんの家は正反対の位置にあるのに、藍ちゃんは私のために……私のためだけに……。

「うつん、大丈夫だから！ 私の家の近くには、友達が」

青信号が点滅し、赤になった。二人そろつて、足を止める。

急に話をやめた私を、隣で心配そうに、藍ちゃんが見つめていた。

「友達がいるの？」

「えっと」

私の家の近所には、恵の家がある。

私は今、近所に恵がいるから大丈夫、と言おうとしていたんだけど

恵と一緒に登下校してるのは、私じゃない。翔なんだ。……まして下校のときは、恵は部活が終わるまで帰れない。帰宅部の私とは、

帰る時間が違う。

そうか、翔か……。恵と翔の中に、私が割り込まなきゃいけないんだ。……そんなの、絶対やだ！

「何でもない……。」

「……ひより？」

恵と翔は、どっちもいい人。きつと快く、私を仲間に入れてくれると思うけど……。二人とも本音を言えば、私のことを邪魔者だと、口を揃えて言うに違いない。

それ以前に、私が二人の間に入るなんて、常に気を使わなきゃいけないし……。無理に決まってるよ。

「あのさ、ひより。」

「……何？」

藍ちゃんは角を曲がると、少し遠くに見える、小さな市民会館を指差した。

「ちよつと、あそこに寄らないか？」

笑顔で訪ねてくる藍ちゃんに、首を横にふることは出来なくて……仕方無く、一緒に行く事にした。

明るい光が道路に差している。オレンジ色にもなっていない。暗くなるのはまだ先だ。

「藍ちゃん……下校途中に、あんな建物に寄り道するなんて、本当は駄目なんだからね?!」

何故か走り出した藍ちゃんに向かって、うんと大きな声でそう言う。

「堅いなあ、まったく！」　藍ちゃんはそう言うと、小走りで追い掛ける私を気にも止めず、会館の正面の自動ドアを開けて、中に入ってしまった。

「まっつてよぉ〜！」
もうちよつとゆっくり行ってくれたって、いいのに！

やっと会館の中に入ると、藍ちゃんは入り口のベンチに、ゆつたりと座っていた。

私は不機嫌なまま、隣に座った。

「大体さ、今までひよりだって、色々寄り道してきただろ？　うちだって、家に真っ直ぐ向かわないで、お前の家まで行こうとしたんだし。」

藍ちゃんは、私が座るなりそう言つと、大きな欠伸をひとつついた。

まあ、確かにそうなんだけど、さあ……。

「ちよつと建物つていうのには、抵抗があつたの。」

「……ふーん。良い子だなあ。」

藍ちゃんは立ち上がると、軽く触れるように、優しく私の頭を撫でた。

……はあく。そうして、いつつも藍ちゃんは、私のことを妹みたく扱つんだから！

「ひより……うち、あそこで空手やってんだよ。」

「え？」

そうしてイライラしていると、突然話しかけられた。

振り向いて、藍ちゃんの視線の先を見ると、そこには小さな体育室があつた。立ち上がって体育室に近付き、開かれているドアの間から中を見る限り、学校の体育館の半分ぐらいの大きさだ。

「へーえ、ここで空手やってるんだあ……お姉ちゃん。」

そう言っつて、自分でくすつと笑った。藍ちゃんも、驚きながらこ
つちを見た。

「お姉ちゃん?!」

「冗談だよ、冗談!　なんか、藍ちゃん、お姉ちゃんぽいなあつて。」

そう言っつたら、藍ちゃんも、おかしそつに笑つてくれた。

藍ちゃんは、お姉ちゃんだけは、絶対に私のことを裏切らないよ
うな気がした。

四十四章：荒井さん

次の日。私は寝不足だった。『消えてほしい』という奈央ちゃんあの言葉が、どうしても離れない。

藍ちゃんと会館で話したとき、最近空手部をさぼっていることも知ってしまった。もちろん、私が奈央ちゃんについて変な相談なんてしてしまったから。もし藍ちゃんが助けにきてくれなかったら、私はどうなってたか。そう考える一方で、もう心配はかけたくなかった。

だから私は学校に行かなければならない。何もなかったかのようなふりをして。

足取りは重かった。遅刻ギリギリの時間に登校する。最近偶然にも早く学校についてしまうことが多かったので、教室に入るなり、恵に「今日は遅いんだね」と、声をかけられた。

「おはよー！どしたの？朝寝坊？」

恵はニコニコしていた。が、すぐ表情を曇らせた。

「ひより、なんか元気ないね」

「いや、朝からお腹痛くってさ、アハハ……」

実際は昨日いじめにあった、ということ、何故か恵には伝えられなかった。

「ちょっと」

そんな中、いきなり表れたのは佐々野だった。私の机のすぐ前に立ち、相変わらずむすつとしている。私は昨日の今日で、恐怖から体が硬直した。隣の恵も、状況が察せず固まっている。

「あんたに、話がある」

ひどくぶっきらぼうな言い方だったが、昨日の呼び出しとは違いストレートな言葉だった。

「何固まってんだよ。安心しな。荒井さんは関係ない」

「あ、荒井さん？」

「“人使い荒井さん”だよ。分かるだろ？陰ではこう呼んでる」

ひとつひとつの単語を、ひどくめんどくさそうに佐々野ミキは発音した。組んでいた腕をふりほどくと、「放課後、4組前の廊下」とピシヤリと言って、教室を出ようと歩きだす。

「ま、待って！藍ちゃんもいていい！？」

とっさにそう言うと、佐々野は黙って頷いて、大きな体を少し揺らしながら去っていった。

「ひよりの交友関係、なんか怖いんだけど……」

私も訳が分からなくなりながら、恵の言葉にため息で返した。

また藍ちゃんに、迷惑をかけちゃうよ 自分のばか。

四十五章：佐々野の呼び出し

昼休み、さっそく藍ちゃんに話をした。恵にはこのまま黙っていたよと決め、ひとりで2組まで行った。

藍ちゃんは、同じように黒く日に焼けた女の子と、窓を背に話していた。私をみかけるなりすぐに近寄ってきて、手を握った。

「大丈夫か。よく学校にきたな。無理してないか？」

まっすぐ私を見ていた。ただ頷いて、手を握り返し、朝あったことを説明した。

「そうか、そんなことが 普通に考えたら、無視だろ？」

「で、でも、奈央ちゃんはこないって」

「あのなあひより、昨日も嘘つかれて呼び出されたのに、何で信じるんだよ」

「本当だよ。昨日とは違う感じだった。藍ちゃんがいてもいいって言っただよ。奈央ちゃんのこと、人使いあいさんって言ったし」

藍ちゃんは納得できないという感じで、顔をしかめていた。握りっぱなしだった手を離すと、『それで気がすむのなら行こう』と言ってくれた。無理矢理笑顔をつくって、その場は別れた。

放課後。藍ちゃんと4組前に行った。生徒はまばらにしかいなくなり、静かだった。2人の間にも会話はなかった。そんな中、佐々野は2組のほうから、すつとやってきた。

「遅くなった。4組の中に誰もいなくなったら、教室に入るか」

相変わらずめんどくさそうに離れていたが、目はチラチラと藍ちゃんを見ていた。見られている本人はそんな佐々野を気にもせず、怖い顔をして壁を見つめていた。

「さ、入るぞ」

少し教室をのぞいてから、佐々野はずかしく中に入っていた。あとから私たちも追い掛ける。3人でドアをしめ、椅子をひっぱりだし円にすると、それぞれこしかけた。

「すみませんでした」

間を置かずに佐々野は言った。

「昨日のアレは荒井さんに言われてやったこと。あんなことやられるなんて思ってた。ただ呼び出すだけのはずが……いや、実際やってしまったから、言い訳にしかない」

私たちは黙っていた。佐々野は続けた。

「管野、藍さんを連れてきてくれたのは好都合だった。藍さんはあたしが唯一尊敬する人なんだ」

「尊敬？椅子投げ付けてきたじゃないか」

「いや、そのときは違う……違うんです。気付かなかった。ごめんなさい。聞いてくれませんか藍さん、あなたは憶えていないと思うけれど」

佐々野はひと呼吸おくと、思い出すようにゆっくりと話している

た。

四十六章：佐々野の呼び出し・2

「あたしは小さい頃からずっと空手をやっていた。出たのは小さな大会ばかりだったけど、負けなしで、道場の顔みたいなものだった」

佐々野は床を見つめながら、ポツリポツリと話を続けた。

「でも小5のとき……あたしは負けた。ある大会での決勝戦、相手は藍さんだった。試合が終わった瞬間、悔しさより尊敬の思いが沸き上がった」

尊敬か。同年代の子にそんな気持ちを持ったことが無かった。藍ちゃんは腕くみをする、覚えてないなあ、と呟いた。試合なんて今まで何度もやってきただろうから、佐々野の顔を覚えていないのも当然だと思った。何より今の体重より10キロ近く痩せていた。

「それから、何故か空手の練習にはもう打ち込めなくなってしまった。あたしは井の中の蛙だったんだ。空しくなったあたしは、藍さんとの試合から間もなく、空手をやめた」

私たちはただ頷くばかりだった。窓の外はオレンジ色に染まり、静かな学校に佐々野の声だけが響いていた。

「それくらいるときからなんだ、奈央と一緒にいるようになったのは。最初はただの友達のもりだったけど、だんだん対等な関係じゃないことに気づいた。今ので色々なことを奈央とやってきた、やらされてきた。昨日ついに爆発したんだ。菅野の呼び出し、そして藍さんを見かけた後に　目が覚めたような感じだった。アキ、サ

キと……昨日一緒にいた2人と、目を合わせた。そして奈央を置いて特別室を出た」

奈央ちゃんは佐々野たちを追いかけなかったし、今日も口をきいていないという。佐々野は声を強めた。

「完全に空手に興味が無くなった訳じゃなかった。藍さんが同じ中学にいると知ったときから、空手部の試合結果を調べたりしてた。そして昨日のことがあってから、もう1度やり直したいと思った。だからこうして呼び出したんだ。本当にごめん！」

膝に手をつき深く頭をさげ、そのまま上げようとしなかった。藍ちゃんは腕をくんだまま、佐々野の頭をまっすぐ見つめていた。

「もう1度やり直すって、どうするんだ？」

「空手がしたい。奈央と離れて、空手に打ち込みたいです」

正直、空手は昨日の出来事に何も関係がなかった。でも私は、誠意をあらわすことに空手を使うだなんて、よっぽど好きなんだろうな……と納得してしまい、微笑んでしまった。藍ちゃんはそんな私を見てから、「ま、新入部員ならいつでも歓迎だけど」と言っただけで笑った。佐々野もやっとなをあげて、目に涙をためながら笑った。

心に暖かいものが広がるのがわかった。気づけば佐々野を許していた。

四十七章：ぱったり

月日はたった。佐々野は空手部に入部し、藍ちゃんと練習に打ち込んでいたようだ。私はというと、普段と変わりなく過ごしている。奈央ちゃんを見かけたら、気付かれる前に逃げることで以外は……。絡まれないように朝は早く登校、帰りは方向が一緒の帰宅部の友達と帰ることにした。

もうすぐ学年が変わろうとしているが、ここ1ヶ月、奈央ちゃんは何もしてけない。いや、見かけるたびにうつむいて、暗い顔をしていたから、本当は気づいていた。私に構っている場合じゃないんだ。奈央は孤立してる。たちと2人でいるところも最近は見えなかった。

冬にしては暖かい日、学校から帰宅した後、制服のまま財布をもつて家を出た。夕飯を買うために、コンビニへ行くことと思った。奈央ちゃんとは元々小学校が違うから、家も離れている。こんな所ではぱったりなんてこと、ないない！

いつも奈央ちゃんに怯えている自分に嫌になりながら、10分くらい道のりを歩く。ブレザーにマフラー。いくら暖かいとはいえ、少し寒いかも。

「おお、ひよこじゃん」

うつむいた視線をひよいと上げる。こんなふうに気軽に話しかけてくる男子は……。

「た、たち」

マフラーにあごをうずめて、ぽそつと言った。今奈央ちゃんに続いて会いたくない人だった。学校指定の紺のジャージに、黒いジャンパー、大きなカバン。バドミンソンのラケットが入っているのかな。いずれにしても部活帰りみたいだった。

「よう、どこ行くの？」

「……ちよつとそのコンビニ」

微笑みながら軽く訪ねてきたのに対して、そっけなく返した。たちはそれ以上突っ込んで聞いてこなかったけれど、まだ微笑んでいた。どちらも無言になって、見つめ合うカタチになったー

「じゃ、じゃーねー」

ハツと我にかえって、私はうつむきながら、前に立っているたちの右側を横切った。何か言いたげだった彼も、「じゃーな」と小さく左手を上げて結局その場は別れた。

コンビニに入ってから、さっきのことを思い出した。また背伸びてたな。顔つきもなんか、大人っぽくなってた。声は前より低くなってるような。

顔が熱くなった。急にあったかいところ入ったからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7592a/>

今すぐ、会いたい。

2012年1月10日00時47分発行